

「部活動」の起源と発展に関する 教育史的研究

2016年度山本ゼミ共同研究報告書

慶應義塾大学文学部教育学専攻山本研究会

序

今日、「部活動」のことが各種メディアで取り上げられるとき、それは教員の多忙さを象徴する問題として論ぜられる傾向にある。実際、経済協力開発機構（OECD）が2013年に実施した調査「国際教員指導環境調査」（TALIS。加盟国など34の国と地域の中学校教員を対象とした）によれば、日本の中学校教員（全国から抽出した国公立中学校192校の教員3,484人と校長から回答を得ている）の一週間の平均勤務時間は53.9時間で加盟国中最長であった（加盟国平均は、38.3時間）。しかもこの長時間勤務は、部活動などの課外活動に費やす時間（7.7時間。加盟国平均は、2.1時間）や、各種の事務作業に充てる時間（5.5時間。加盟国平均は、2.9時間）など、授業以外の仕事の主たる要因であることが明らかにされた（授業時間は17.7時間で、加盟国平均の19.3時間よりむしろ短かった）。本年1月6日付の朝日新聞（朝刊、社会面）には、昨年3月に「部活がブラック過ぎて倒れそう。顧問をする、しないの選択権を下さい！」と呼びかけた公立中学校教員たちが2万人を超えるネット署名を集め、文部科学省に提出したことが紹介されている。

このように、部活動が学校教員の多忙さを象徴する重要な要因となっていることは、裏返しに言えば、部活動が学校における各種の教育活動の中で、必要欠くべからざる重要な取り組みとして、この国の学校文化にすっかり定着し、学校教育の存在と完全に融合していることを物語るものでもある。今や、中学校・高等学校などの中等段階の学校はもとより、小学校段階の学校教育においても、部活動の存在はそれ自体が自明視されている。さらに大学段階でいえば、日本の各種スポーツをリードするような役割が、大学の部活動に与えられているといっても過言ではない。

だが、日本の学校文化に普く定着を見た部活動も、元来は「課外活動」として発足したものであった。野球・サッカー・ラグビー・バレーボール・バスケットボール・水泳・陸上競技・柔道・剣道など、各種スポーツの全国大会が華々しく開催され、人々の高い関心事となっている高等学校や大学の部活動は、今日においても「課外活動」として位置づけられている。では、これら各種スポーツの部活動が、課外活動であるにも拘わらず、学校教育の一環としてすっかり定着し、学校文化の重要な一翼を担うようになったのは一体なぜなのか。部活動は、いかなる導入過程や発展経過を通して、日本の学校文化に根づいていったのか。

本共同研究は、日本の学校教育において、部活動がいかなる経緯に基づいて発足し、定着を見、発展を遂げるに至ったのかを、明治期を中心とする近代教育史の歩みの中に探ろうとする試みである。ただし、学校教育における部活動発展のいわば全体史を描き尽くすことは、到底、学部学生レベルの研究のよくなし得るところではない。それゆえ本共同研究では、第一に、研究対象とする部活動をいわゆる運動競技系のそれに限定した。第二に、本研究では部活動の発足・定着・発展の過程を、主に高等教育段階の諸学校の事例を通して探ることにした。二つ目の限定を設けた理由は、部活動とは当初高等教育段階の学校において取り入れられたものが、徐々に中等教育段階や初等教育段階の学校へと波及したものであった、との仮説的着想に基づいてのことである。具体的には、東京帝国大学、慶應

義塾、早稲田大学、東京高等師範学校、学習院、の五校に加え、中等段階の学校として東京府立第一中学校を考察の対象とした。

東京帝国大学は、日本の近代学校制度において最初に創設された大学であり、少なくとも1897（明治30）年までは日本における唯一の大学であったことから取り上げる必要があると考えた。また、この学校の前史やこの学校との接続関係も考えて、論考の及ぶ範囲で開成学校、大学予備門や第一高等学校の事例も追うことにした（なお、同大学は明治10年の創設時には東京大学、明治19年から30年までは帝国大学という名称であった）。慶應義塾と早稲田大学については、代表的私学としてその事例を追うことにした。東京高等師範学校は、師範学校を代表する学校として取り上げた。学習院については、宮内省管轄の官立学校という独自の性格に着目した。また、東京府立第一中学校を取り上げたのは、今日の高等学校教育における部活動の趨勢の源流をこの学校の事例に求めたからである。

部活動の成立・発展史については、各学校ごとに独自の事情や特質を認めることができる。その由来でいえば、東京帝国大学では開成学校や大学予備門時代の外国人教師による導入が重要なトピックをなした。慶應義塾では塾祖福澤諭吉の教育方針が重要な意味をもった。東京高等師範学校では教員養成に関わる政府の方針と寄宿舎の存在とが重要な役割を担った。だが、そうした各学校の個別的事情を総括しつつ、マクロな視線から部活動の歩みを全体的に眺めるなら、そこにどのような進展のプロセスを見出すことができるのか。各章での学校別論考に先立って、その個別的発展史の理解をスムーズに進めるためにも、ここで敢えて部活動史の大枠のみ概述しておこう。

明治初期において、高等教育段階の学校が社会の指導者養成を目的としていたことはいうまでもない。そこでは日本の社会・文化の将来の発展のため、西洋由来の新しい学術や文化が積極的に取り入れられた。西洋の近代学術については学校の正課に採用されたが、幅広い内容からなる文化的営為をすべて正課に取り入れることには限界があった。そうした中、学生たちの側から自然発生的で任意的な活動が、いわば課外活動として出現するようになった。そうして発生した課外活動の中でも、運動競技活動は重要な一翼を担うことになったが、その導入には、外国人教師や留学経験者が果たした役割が小さくなかった。野球を日本に最初に紹介した（1872年）のが第一大学区第一番中学（後の開成学校）のアメリカ人教師ホーレス・ウィルソンであったことは、その典型的な証左の一つである。

このように、少なくとも明治10年代までの運動競技活動は各人の任意によるもので、必ずしも組織化されたものではなかった。だが明治10年代半ば頃から、任意の課外活動ながらも、各学校にて「運動部」が成立するようになる。中でも漕艇と野球は、運動競技の花形であった。漕艇は、1883（明治16）年、東京大学にそれまで存在した複数のボートクラブを統括する組織として「走舸組」が結成された。同年に開催された東京大学と体操伝習所との対校試合は日本最初の対校レガッタといわれる。帝国大学に移行した後の1887（明治20）年には、第一高等中学校や東京商業学校、東京高等師範学校との間で対校試合が組まれるようになった。野球は、1886（明治19）年に大学予備門から発展した第一高等中学校に、最初の野球部が発足した。しかし、それ以前にも、帝国大学の前身である駒場農学校（明治15年）や工部大学校（明治17年）にはベースボールクラブが存在していた。

慶應義塾でも、野球部の創部は1888（明治21）年のことであった。

明治10年代の動向として、もう一つ注目されるのは、各学校にて「運動会」が開催されるようになったことである（下記の組織としての「運動会」に対し、これは行事としての「運動会」ということができる）。その最も早い事例は、1878（明治11）年に札幌農学校で行われた遊戯会といわれる。東京大学では、大学予備門の学生も含めて1883（明治16）年に運動会が開かれ（予備門のイギリス人教師F.W.ストレンジの首唱といわれる。内容は競走や砲丸投げ、幅跳びなど、陸上競技会的なものであった）、慶應義塾でも1886（明治19）年に第一回運動会が実施された。ただし、この時期の運動会は、競技活動というよりも、むしろ学生の健康や心身の発達を主目的とするものであった。これは、当時の運動競技の練習自体が任意的で非組織的な段階にあったことと関係したものと考えられる。

明治20年代に入ると、運動競技関係の部活動が益々活発に行われ、各部が乱立するようになったため、それらの組織の運営を統一する必要性が生じた。運動競技活動を統括する組織の嚆矢は、帝国大学が1886（明治19）年に発足させた「運動会」であったといわれる。

「運動会」は同大学の陸上運動会と水上運動会を主宰する団体であり、その後、社団法人化（1898年）されるまでに発展した。この帝国大学の例に倣って、第一高等中学校や慶應義塾などで、部活動を統括する団体が設立されていく。

ただし、慶應義塾のように運動部活動の統括団体として「体育会」を組織する例（明治25年）もあったが、多くの学校では運動競技と学芸関係の活動との運営上の統一調整を図るために、いわゆる「校友会」が結成する動きが生じた。第一高等中学校では、1890（明治23）年に「校友会」が結成され、文芸、ボート、撃剣、柔道、弓術、ベースボール、ローンテニス、陸上運動、遠足の九部が加入した。高等商業学校でも、1897（明治30）年に運動競技活動と文芸活動を統括する学生団体としての「一橋会」が組織された。これらの校友会では、概して運動競技活動に比重が置かれる傾向にあったが、校友会の結成は、各学校当局が学生たちの課外活動を重視したこと、すなわち、部活動が各学校にとって必要欠くべからざる取り組みとして認識されたことを物語っている。

運動部活動を統一的に組織化しようとする動向と併行して、それを教育課程の内部に組み込もうとする動きも現れた。それはとくに師範教育の世界において進められた。すでに1886（明治19）年5月に、初代文相森有礼は高等師範学校に対して、「教場内外一切ノ事業ヲ以テ気質鍛錬ノ資ニ供シ就中寄宿舎及ヒ体操ニ係ルモノヲ以テ教場外最重ノ事業トシ」との文部省訓令を発していた。1889（明治22）年には、東京府尋常師範学校にて、「体育ヲ奨励シ兼テ戸外遊戯法ヲ実修セシムルカ為メ定時課業ノ外毎日特ニ運動ヲ課ス」との「遊戯規則」が定められた。同校では、1898（明治31）年に、剣道、柔道、器械体操、野球、テニスの5部から成る「尚武会」が結成されたが、生徒はこのうち一つの部に所属することが義務づけられた。東京高等師範学校でも、1896（明治29）年に「運動会」が結成され、それを構成する柔道部、撃剣及銃槍部、弓技部、器械体操部及相撲部、ローンテニス部、フットボール部、ベースボール部、自転車部の8部のうち、1部もしくは数部に入部することが課された。このような課外活動の必須化は、運動競技以外の文芸活動には認めることができない。課外の運動競技活動を、課外のままで生徒に必須のものとするとい

う方針は、師範学校に留まらず、諸学校における課外活動の組織化にも影響を及ぼしていく（東京商業学校の「一橋会」や東京府立開成中学校の「校友会」に同様の動きを見ることができる）。

各学校での「校友会」を通して、部活動は日本の学校文化に堅固に根づいていったが、その発展に拍車をかけたのが、一つには対外試合の増加であり、もう一つには各種競技団体の組織化であった。

対外試合は、部活動の勃興期にも行われていた。上述のように、帝国大学では1887（明治20）年に漕艇の対外試合を組んでいたし、同年に開催された運動会でも他の官立学校学生の招待競走を加えるようになっていた。ただし明治20年代までの対外試合は、学生の心身の発達や学生間の親睦を主目的とするもので、必ずしも他校との対抗が強く意識されていたわけではなかった。それが明治30年代以降は、競技技術の向上が謳われるようになり、それに伴って次第に競技色を強めていく。例えば、帝国大学「運動会」の趣旨は、発足時（1886年）の規則には「本会ノ趣旨ハ会員ノ心身ヲ強壯快活ナラシメ兼テ交互ノ親睦ヲ謀ルニ在リ」とあったが、1898年の社団法人化後の規則では「本会ハ諸種ノ運動ニ由リテ会員ノ心身ヲ強壯快活ナラシメ且運動方法ノ進歩ヲ図ルヲ以テ目的トス」と改められている。

野球でいえば、明治20年代から30年代初頭にかけては第一高等学校野球部の全盛時代といわれたが、それは対校試合での盟主としての地位を保持するための厳しい鍛錬によって獲得されたものであった。一高全盛期以後、学生野球の盟主の地位を競い合った早慶両校の対抗戦（第一回は1903年開催）も徐々に対抗意識がヒートアップし、1906（明治39）年には双方の応援学生が過激な問題行動を引き起こしたため、その後1925（大正14）年まで中断される。対外試合が、各学校の存在を背負うほどの重みをもつに至ったことを象徴する出来事といえるだろう。

競技団体の組織化について重要な役割を果たしたのが、1911（明治44）年に創設された大日本体育協会であった。同協会の由来は、1912年にストックホルムで開催される第5回オリンピックに日本の参加が要請されたことにあり、必ずしも各学校での競技活動がその起源となったわけではなかった。だが、当時のスポーツ競技の中心は学生であったことから、同協会の発足には、帝国大学、高等師範学校などの学校関係者の役割が不可欠であった。初代会長に東京高等師範学校長の嘉納治五郎が就任したことが、その事情を雄弁に物語っている。また、同1911年に開催されたオリンピック予選競技会に出場した選手の大半は学生であった（参加資格は、年齢が16歳以上の者、中学校あるいはそれと同等以上と認められる諸学校の生徒及び卒業生、在郷軍人会員とされた）。

同協会の発足に伴って、これ以降、毎年夏に水上競技大会、秋に陸上競技大会が開催されることになったが、翌1913（大正2）年の第1回陸上競技大会には、帝国大学や専門学校に加えて愛知県第一中学校や宮城県第一中学校などの中等学校が参加した。このように大正年間に入ると、中等教育段階の各学校でも部活動が盛んに組織されるようになる。1915（大正4）年に第1回全国中等学校優勝野球大会（今日の全国高等学校野球選手権大会の前身）が開催されたのは、この動向を象徴する出来事であった。

1913年には文部省から『学校体操教授要目』が刊行され、初等・中等学校の「体操科」の教授要目が初めて制定される。そこでは「体操科教授時間外ニ於テ行フヘキ諸運動」として、角力（男子）・弓術・薙刀（女子）・遠足登山ノ類・水泳及船漕・ベースボール（男子）・ローンテニスなどが例示されるとともに、寒冷地では氷上・雪上などが推奨されている。国が定めた体育教育に関する教則の中に、課外活動が含め入れられたことは、すでに大正期には中等段階の学校においても、部活動が不可欠の教育的価値をもつものと位置づけられたことを物語っている。

以上が、明治から大正期にかけての部活動史に関する極めて荒削りなスケッチである。このスケッチを踏まえながら、本論の各章にて、運動部活動がなぜこの国の近代教育に根づいたのかを、各学校別の部活動の歩みを通して探っていく。それらの叙述を通して、歴史的に形成され認知された部活動の教育的価値にいかなるものが見出されるのか、それら教育的価値の中で何を再考し、何を継承し、あるいは何を創造していくべきか、についても検討を加えていきたい。

もとより、学部学生による共同研究にオリジナリティーに富んだ研究成果の発信を期待することには限界がある。本共同研究も、基本的には、先行研究の知見を学生たちなりに再構成する、という作業を超えるものではなかった。また、引用文の出所や論述の根拠が未提示であったり、本文や注記の形式が未整備であったりする箇所も少なくない。その点については、指導教員として十分に反省しなければならない。

だが、そうした研究面での稚拙さが残されたとしても、学部学生による単年度の取り組みとしては、可能な限りの探究を試みたものとして評価したい。今年度のゼミは、指導教員の事情によって三年生だけのゼミとなったが、全員の意欲的な取り組みにより活気に満ちたゼミであったことに改めて敬意を表したい。最後に、今年度の共同研究の完成を喜ぶとともに、この経験を通してゼミナリストたち一人ひとりが、今後学問的にもさらに成長していくことを心より期待する次第である。

2017年3月31日 山本正身

目 次

序	i
第一章 東京帝国大学における部活動	1
はじめに 1	
第一節 活動の由来と導入経緯 2	
第二節 各競技の黎明期 3	
第三節 各競技の定着期 5	
第四節 学校と校友会の関わり 7	
考 察 8	
第二章 慶應義塾における部活動	10
第一節 草創期—自主活動の時代— 10	
第二節 定着期—「体育会」の発足— 12	
第三節 発展期—対外試合の普及と競技団体の成立— 15	
まとめ 19	
第三章 早稲田大学における部活動	24
第一節 早稲田大学の概要 24	
第二節 部活動の成り立ち 26	
第三節 各クラブの成り立ちと対外試合 31	
まとめと考察 34	
第四章 東京高等師範学校における部活動	37
はじめに 37	
第一節 運動会設立前の課外活動 37	
第二節 運動会の設立から校友会設立の頃の部活動 39	
第三節 対外試合を通じた各競技の発展 42	
総 括 44	
第五章 学習院における部活動	47
第一節 学習院の沿革 47	
第二節 校友会組織「輔仁会」 48	
第三節 輔仁会の活動詳細 49	
むすび 51	
第六章 東京府立第一中学校における部活動	53
第一節 東京府立第一中学校草創期 53	
第二節 学友会発足とその定着 55	
第三節 各部の動きとその後の発展 59	
考 察 61	
参考文献一覧	64

<分担執筆者>

第一章 日野 浩明（文学部教育学専攻3年）

第二章 奥 ささら（文学部教育学専攻3年）

第三章 平岡 恵梨（文学部教育学専攻3年）

第四章 末吉 陽香（文学部教育学専攻3年）

第五章 正木優里江（文学部教育学専攻3年）

第六章 及 部 力（文学部教育学専攻3年）

第一章 東京帝国大学における部活動

はじめに

総合大学としての東京大学の始まりは江戸時代に存在した昌平坂学問所・開成所・医学所の3つの学校である。これらは明治維新後、明治新政府により昌平学校・開成学校・医学校として復興した。1869（明治2）年にこれらは大学・大学南校・大学東校となる。しかし、国学と漢学を主としていた国・漢学派の大学と、社会・人文諸学を主としていた洋学派の大学南校との間の思想的争いが深刻化し、1871（明治4）年に大学は閉鎖された。大学南校はその後南校、第一大学区第一番中学へと発展し、1873（明治6）年4月に開成学校となった。大学東校は東校、第一大学区医学校と改称し1874（明治7）年に東京医学校となった。これらの2校を合併し1877（明治10）年4月に東京大学が誕生した。

大学と大学南校の思想的対立からも見て取れるように、当時の学术界には洋学優位の学問的風潮があったと思われる。洋学を学び日本の近代化を進め、欧米列強の植民地とならないために多くの日本人が欧米の学問や考え方を得るために留学した。しかし、彼らより先に西洋の思想をもたらしたのは、お雇い外国人教師であった。破格の給料を受け取り母国から遠い日本に来た彼らは、自国の文化や習慣を保とうとした。その中の娯楽の一つがスポーツである。

明治維新以前から外国との交易のために開港されていた港周辺には、外国人居留地が存在していた。その中でも江戸に近い横浜は、1859（安政6）年の開港と同時に居留地が作られ貿易の活発化とともに急速に発展する。敷地内には1861（文久元）年につくられた馬場（競馬場）、同時期に活発化した陸上競技、その数年後に建造されたボートハウスなど様々な施設が作られ、各種の競技が行われていた。当時の居留人のスポーツ観について、武田英治は次のように指摘している。

幕末から明治初期にかけて、多彩にくりひろげられたハマのスポーツの中心は、イギリス人であった。そしてそのクラブ設立の中心人物は、言うまでもなく大英帝国の栄光をになう人物を養成するために改革されつつあったパブリックスクールの出身の、いわゆる「ジェントルマン」たちであった。彼らにとってスポーツとは、一方では国内を統治し、他方では次々と勢力を拡大しつつあった植民地を支配する指導者の旺盛な行動力と教養を示すものであった⁽¹⁾。

このような教育を受けている外国人に触れる機会があったり、イギリス出身のお雇い外国人教師の教育を受けたりした生徒たち、また欧米に留学していった日本人も、こうした外国人たちのスポーツ観やそれに関する慣習を参考にしようとしたことは容易に想像できる。つまりスポーツはそれを独立したものとして学ぼうとし日本に紹介されたのではなく、いわば教養の一部として学ばれていったといえる。

その中で体操・保健的体育に特化した研究機関として体操伝習所が1878（明治11）年

に設立された。体操伝習所は日本の開国により流入した体操や保健的体育に対する悪条件や無理解から生じる反発を抑え、より深い原理と方法の研究を行うために設立された。この時アメリカ人のリーランドが招聘され、教鞭をとった。次章ではその体操伝習所から東京大学への影響の有無について述べる。

第一節 活動の由来と導入経緯

東京大学の部活動に対して影響を与えた可能性がある組織として、上述の体操伝習所がある。体操伝習所は 1878 年に設立され、その目的は当時日本の学校体育の基礎を築き、学校で行われる体操の内容を決定することであった。そのためスポーツの研究は行われてこなかったとされてきた。

しかし君島によると、リーランドの通訳兼助手をしていた英語教師の坪井玄道は、遊戯の研究も行っていた⁽²⁾。3年間の任期中にリーランドから体育についての知識及び技術を学び取り、リーランドの後継者となり伝習所をリードする立場になった。坪井はのちに東京大学のスポーツ関係の発展に寄与する外国人教師ストレンジからも室内体操以外の各種の戶外スポーツの伝授を受けた。リーランドの在任中は、日本の学校体育の基礎をつくることで手一杯であったが、その後の体操伝習所は体操だけでなく各種スポーツの研究のも行なっていたようである。

坪井は研究心が強く、リーランドやストレンジに聞くだけでなく、英米のスポーツ書を取り寄せて研究している。その活動のひとつでストレンジの出版した陸上競技やボートなどの英国式スポーツについて書かれた“Outdoor games”を『西洋 戶外遊戯法』として翻訳出版している。この本は十年ほどで全国の各学校に行き渡った。中にはベースボール・操櫓術・ローンテニス・クロッカー・フートボール・綱引き・二人三脚・行進法などが載っていた。その後全国で行われる運動会の競技内容にも大きな影響を及ぼした。よって、この本が東京大学にも所蔵され、師や学生が実際に影響を与えた可能性は十分にある。体操伝習所からの直接的な影響は認められないものの、『西洋 戶外遊戯法』のような出版物を通じた影響の可能性は否定できない。

『東京帝国大学五十年史』によると、「外国人教師より諸種の運動遊戯を傳習し、運動遊戯は運動會設立以前に於て、既に相当の発達を遂げ居りしものなり」⁽³⁾とあり、1886（明治 19）年の帝国大学運動會設立以前にかなりのスポーツ活動が行われていたと推測できる。数多くいたお雇い外国人教師のなかで注目すべきは、フレデリック・ウィリアム・ストレンジである。イギリス南西部デヴォンシャー州出身で、オックスフォード大学を卒業後 1875（明治 8）年 3 月に来日した当時 20 歳の青年である。体操教師でもなく普通の英語教師であったストレンジは、のちに大学予備門、第一高等中学校となる東京英語学校に勤めた。重要な教師としての招聘ではなく、優秀な若者として数か月お試し雇用があったのちに正式に雇用された人だった。そのため給料も外国人教師としては低かった。

彼はスポーツ好きであつたらしく、横浜の外国人居留地でのスポーツクラブに積極的に参加している⁽⁴⁾。前述の通り、当時の居留地では母国と同様な様々なスポーツが行われており、競馬・陸上競技・漕艇・クリケット・野球・自転車・射撃などがあつた。

渡辺によると彼の実績は、「(1) 漕艇、陸上競技などの近代スポーツの精神的な面を含めて、東京大学や同予備門の学生にはじめて本格的に教えたこと。(2) 上記の学校でボートレース、陸上競技会の開催を進言し、これを実現して、それらの運営に優れた手腕を発揮したこと。(3) 日本ではじめての課外スポーツ組織である「帝国大学運動会」の結成に尽力したこと」とある⁽⁵⁾。

渡辺によればストレンジのスポーツにおける功績は来日 9 年目から始まっている。横浜の外国人居留地のスポーツクラブでクリケットの上位チームや 1 マイル競争、クリケット投などの競技会で優勝もするなど、ストレンジは優秀なスポーツ選手だったといえる。また漕艇・野球のクラブにも所属しておりオールラウンドプレーヤーだったようである⁽⁶⁾。彼からすればスポーツを行うことは特別ではなく、イギリスで普通に行われていたことを日本の学生にも広めようとしたことが窺える。また、彼が東京大学においてスポーツの伝道師いわれる由縁は陸上競技会・競漕会を始めたからである。「学校による陸上競技会の試みは、前海軍兵学寮や札幌農学校でも行われているが、日本人にとって決して身近なものではなかった」⁽⁷⁾。新しいことを始めるにはそれなりの準備が必要であり、これは東京大学の運動会においても例外ではなかった。その準備の一環としてストレンジは講演会や本の出版を行なった。講演会には大学総理も出席し、放課後はストレンジ自らが調達して来た用具と彼の指導のもと練習が行われ校庭が賑わった。このように学校側は運動会の開催にかなり積極的であったといえる。学校側でストレンジを支援していたのは、アメリカへの留学経験のある東京大学幹事の服部一三^{いちぞう}、2 度の英国留学経験のある同大学理学部教授の菊池大麓^{だいろうく}であった。ここで支援者として海外留学の経験のある二人が登場するのは偶然ではなく、彼らがかつて経験し良いイメージを持っているから支援したと考えられる。

ストレンジの著書である“Outdoor games”には陸上競技に関することに大半のページが割かれていた。これは間近に迫った陸上競技会を意識したものである。またこの著書にはベースボールも書かれており各種目の中で 1 番多くのページがあてられていた。

次に 1884 (明治 17) 年に行われた走舸組競漕会について述べる。ストレンジと走舸組との関わりは、走舸組が新艇を建造するにあたって寄付金を募っていたところ、5 円という多額の寄付をストレンジが行ったことに始まるようである。その新艇の建造を祝して行われた競漕会には大学の幹部が多数出席し、こちらも学校からの支援があったといえる。尚ストレンジは当日審判を務めた。走舸組に対するストレンジの功績は彼への感謝状から見て取れる。「感謝状の趣旨は、会の創立、ボートの建造、競漕会の開催と成功、そしてそれがもたらした走舸組の学内における栄光など多くにわたる彼の熱心な尽力に謝し、彼をその育ての親としているものである」⁽⁸⁾。

このように学生と教師とを巻き込んだスポーツ活動を行ったストレンジこそ、東京大学における組織的なスポーツ行事を始めた最初の人物と言えるだろう。

第二節 各競技の黎明期

それでは、東京帝国大学における各種部活動の黎明期の様子はどのようなものだったの

か。ここでは、ストレンジの活動との関わりが最も密接だった漕艇部と陸上競技部、ならびに同校の前身である開成学校が日本野球発祥の地と称されることから野球部を取り上げる。

(1) 漕艇部

『東京帝国大学漕艇部五十年史』には、「ボートの黎明期も亦その例に漏れないで、僅か六十餘年の昔でありながら…學生スポーツとしての由来と年代とに就ては遺憾ながら明解を缺くのである」⁽⁹⁾とあるが、『神奈川県体育史』によると「すでにのべたように、居留地外国人はボートレースを好み、明治以前から港で競漕会を開いていた」⁽¹⁰⁾。また前掲の『漕艇部五十年史』にも「遡って当時の学外の漕艇界を見るに、海軍の各軍艦、海軍兵学校、商船学校などがそれぞれ多数のボートを所有し、時にレースを行って観衆の目を喜ばしたが、特に海軍の端舟競漕会は盛んで、…」⁽¹¹⁾などと記述されている。また、『近代日本体育史』には「漕艇は明治維新に我が海軍と在留外人との間に行はれたやうである。…東京大学の幹部服部一三が、明治六、七年頃に米国捕鯨船の不要ボート七八隻を購入してからの事で、当時このボートを浅草橋の野田屋といふ船宿に預け置いていた」⁽¹²⁾とあるように、確実に誰が紹介したのかということは不明だが、海軍や商船関係の学校の学生間や外国人の競漕を見聞きした学生が、遊びとして始めたのが最初ではないかと考えられる。

その後 1883 (明治 16) 年頃までにはいくつかのボートクラブが存在したが、大学所有のボートは 2 隻しかなかったのでボートの貸し付けの統制を図るために、クラブの統括団体として走舸組が結成された。これが東京大学における部活動の始まりではないかと思われる。翌 1884 (明治 17) 年の競漕会後からは急速に発展し、1885 年には東大と外国人のチームがレースを行うまでになった。

(2) 陸上競技部

陸上競技部は、東京大学運動会ホームページによれば、陸上競技部は 1886 (明治 19) 年創部とある。しかし、年号の記述しかないのではどのような経緯で発足したなどは分からない。だが、横浜の外国人居留地では陸上運動が早くから行われていたことを考えると、一つの集団としての活動が始まったのは遅くとも 1877 (明治 10) 年頃と見ることができ、したがって陸上競技なるものを行う学生は存在したと思われる。

(3) 野球部

東京大学運動会硬式野球部は 1919 (大正 8) 年に正式に発足した。同野球部ホームページによれば「1873 (明治 6 年) に開成学校 (のちの旧制一高) へ野球が伝えられ、旧制第一高等中学校 (のちの旧制一高) では 1886 年 (明治 19 年) より「ベーすぼーる会」が活動を開始」とあり、正式な発足以前から活動存在していたといえる。

日本野球発祥の地は開成学校運動場とされている。しかし、野球の伝来や学生への普及がどのように広まったのかについては、野球も例外ではなくさまざまな説が存在する。どれが正しいかについては言及を避けたい。

ここで取り上げる一説によれば、ベースボールの始まりは明治五年頃である。南校（第一大学第一番中学）に英語・歴史を教えるウィルソンという外国人がいた。君島一郎の『日本野球創世記』によれば、「この人常に球戯を好み体操場に出てはバットを持ちて球を打ち余輩にこれらを取らせて無上の楽しませとせしが、やうやくこの仲間に入る学生も増加し、明治六年第一番中学を開成校と改称し、…運動場も天覧ありしくらいにてひろびろとできたりし事故」⁽¹³⁾とあり、教師主体の有志の活動であったことがわかる。また同書には「来原彦太郎（のちの木戸考正候）、大久保利和、大久保伸熊（のちの牧野伸頸伯）ら三人が、明治四年の岩倉具視使節団につれられて渡米し、三年間フィラデルフィアのミドル・スクールでベースボールの手ほどきを受けて帰り、明治八年に開成学校にはいって来た。彼らはベースボールのボールを持ち帰っていた」⁽¹⁴⁾とあり、前述したお雇い外国人からの伝来と留学した日本人からの二つのパターンを見ることができる。

(4) 黎明期の対外試合

この時期の対外試合は日本人チーム同士や学校対抗ではなく、外国人チームとの試合が行われていた。野球における初めての国際試合は 1896（明治 29）年 5 月に行われた横浜外人チーム対第一高等学校チームとの対戦であった。結果は一高が大勝した。また、ボートレースは明治以前から外国人内で行われていたのが国際試合となって発展した。その最初の試合は 1885（明治 18）年 11 月の東京大学のクルーと行われた。結果は外国人チームの勝利であった。

さらに渡辺によれば、東京大学や同予備門のスポーツが開始されると、横浜外人クラブ員の東大・帝大運動会への出場、東大・帝大生の外人クラブの競技会への相互の参加が行われ、交流が盛んになっていった⁽¹⁵⁾。

第三節 各競技の定着期

帝国大学創立を機に、各運動組織を一つにまとめ管理統括する「運動会」が 1886（明治 19）年 7 月に設立された。運動会の設立当時の目的は「会員の心身を強壯快活にして、かつ会員相互の親睦を図る」とされ、学生・職員らが会員となった。『東京帝國大學五十年史』には同年の運動会設立当時の状況が次のように記されている。

東京大學以来本學職員學生の間に於て諸種の運動遊戯行はれ居たるも、未だ一定の組織を爲すに至らざりしが、此の時に及びて始めて運動會の成立を見るに至れるものなり。…常に身體の健全を維持するに必要なることのみならず、精神の健全なる發達を遂げしめ、従つて學術道德に資する所少なからざるを以て、大いに運動遊戯を奨励せんとして運動會の組織を成せるなり⁽¹⁶⁾。

これによれば、運動はただ健康のためだけでなく、学業面においても必要と考えていたことがわかる。

運動会が設立されるということは、そこまで学生間での自主的なスポーツ活動の規模が

大きくなり、統括する組織が必要とされたことを示している。まさに走舸組結成のいきさつと同じである。また学校側としてはただ自主的組織の高まりにより運動会を設立したのではなく、体を動かすことが学業をしていくうえで必要と判断したといえる。健全な身体の維持、健全な精神をつくり勉強に耐える体の基礎体力作りを重視すると明言されているところからも、学校側としてこの課外活動に教育上の意義を見出していたといえる。

この時期の対外試合として漕艇部は、学内の学部対抗の競漕会が行われていた。法科・工科・医科・理文科から各一艇を出し、1887（明治20）年から行われた。その後各学科同時の熾烈な優勝争いは続き、第8回には新聞社から賞品が出るようになった。また、対外試合も一高と高商との競漕が1890（明治23）年以来7年ぶりに開催されるなど、回数を重ねていくにつれて規模は大きくなり新聞にも載るようになった。第6回以降は、各学科の船だけでなく外国人チームや軍などと招待レースを行っていた。このように競漕会の規模が拡大するにつれて競漕の人気も急速に拡大していった。

野球については第一高等中学校および第一高等学校におけるベースボール会の活動が注目される。一高の野球部黄金時代は1896（明治29）年から1905（明治38）年までである。国内負けなしであり、外国人チームと戦っても10年間負けなしと、今では信じられないくらいの強豪であった。それも1905年に早稲田大学・慶應義塾大学に連敗し黄金期の終わりを迎えた。

第四節 学校と校友会の関わり

日本において学校衛生や学校保健が検討され始めたのは幕末から明治初期、主に「学制」発布の後である。川島虎雄によれば「学制においては、小学校における保健体育として養生法という教科が定められていた」⁽¹⁷⁾とあり、初期の学制は学校保健の重要性を理解していたと言える。しかし、後の「教育令」、「小学校令」には衛生教育についての独立した教科はなくなっていった。その理由について川島は

文部省布達「小学校教員心得」によると、「身体教育ハ体操ノミニ依存著スベカラズ。宜ク常ニ校舎ヲ清潔ニシ、光線温度ノ適宜、大気ノ流通ニ留意シ、又生徒ノ健康ヲ害スベキ癖習ニ汚染スル事ヲ予防シ、以テ之ニ従事スベシ」とある。これは「学制」公布後の学校保健の諸要点を集約し、学校体育の中でとらえたものとして注目に値すべきものである⁽¹⁸⁾。

と指摘している。その後、「修身」に健康な身体を養うために必要な習慣や態度の要請に関する内容が多く取り入れられ、知識としての内容は理科で指導されることとなった。すなわち、保健教育は修身・理科・体操に分散した形で教えられることになったのである。

その中で学校側は、真の体育奨励と合理的な衛生的配慮と保健衛生的手段に裏付けようとしていた。つまり体育の進歩を徳育や運動技能より衛生を重視して客観的に進めていた。日本の近代化には、近代的な保健制度が不可欠であったからである。すなわち体育を生徒の健康管理の手段としようとしていた。また、知育だけだと不十分とし体育は学校風紀を

矯正し校紀の振肅するとされ、徳育との関係からこの時代の体育に対する期待は大きかったのである⁽¹⁹⁾。

中澤篤史は、校友会の果たした役割について「校友会活動は、抽象的にいえば、頹廢した社会から純良な学生を遮断し、世間の悪風汚俗から遠ざけ、寮を中心とした自治生活によって人物を養成する機構であった」、あるいは、「近代学生スポーツが自然発生的なものでありながらも、そこで形成された人物が当時の為政者の期待する指導タイプに一致した」と述べている⁽²⁰⁾。また校友会と大学との関わりについても、「大学当局は、学生の左翼化を防ごうとする文脈で、「運動会」を支援した。…大学当局は、左翼学生の対極に運動部員を布置し、そこに実現すべき〈健全な思想〉を見出していた」と指摘している⁽²¹⁾。このようなことから、学校側は自分たちの理想像と校友会活動が自然と目指したものが一致していたために、政府や学校が学校教育の一部として取り込んでいったと考えられる。

総括

東京帝國大學において、部活動の導入は外国人教師・海外留学を経験した日本人から伝わり、趣味として行っていた彼らから生徒たちに伝わった。その後、学生間で自主的活動に拡大し、それを学校は組織化し公認した。東京帝國大學は先進的な学府として全国の公立学校の先導者たる存在であった。それは体操伝習所からの影響やストレンジの活動を認め支援していることに見られる。さらに運動会を設立し学生が部活動をまとめる組織をいち早くつくりだした。大学としても運動の教育的意味を見出し、修身や規律のある人間形成の一つとして公認していった。戦争や社会主義観の広がりなどの時、学生を社会から切り離された部活動の中で健全に育てるためにそれを利用していこうとした。また、各部活動が全国での試合で勝利していくことは学校の権威を高めることにも貢献していったといえる。

〔註〕

- (1) 武田英治『神奈川県体育史』第一印刷株式会社、1973年、5頁。
- (2) 君島一郎『日本野球創世記』ベースボールマガジン社、1972年、30頁。
- (3) 『東京帝國大學五十年史』東京帝國大學、1932年。
- (4) 渡辺融「F. W. ストレンジ考察」(『体育学紀要』第7号、東京大学教養学部体育研究室、1973年、所収)、14-16頁。
- (5) 同上、8頁。
- (6) 同上、15-16頁。
- (7) 同上、17-18頁。
- (8) 同上、19頁。
- (9) 東京帝國大學漕艇部編『東京帝國大學漕艇部五十年史』東京帝國大學漕艇部、1936年、4頁。
- (10) 前掲『神奈川県体育史』、9頁。

- (11) 前掲『東京帝國大學漕艇部五十年史』、12頁。
- (12) 真行寺朗生・吉原藤助『近代日本体育史』、有明書房、1984年、48頁。
- (13) 前掲『日本野球創世記』、19頁。
- (14) 前掲『日本野球創世記』、20頁。
- (15) 前掲、渡辺融「F. W. ストレンジ考察」、17-19頁。
- (16) 前掲『東京帝國大學五十年史』、667-668頁。
- (17) 川島虎雄『日本体育史研究』黎明書房、1982年、15頁。
- (18) 同上、16頁。
- (19) 前掲『近代日本体育史』、49-50頁。
- (20) 中澤篤史「大正後期から昭和初期における東京帝国大学運動会の組織化過程：学生間および大学当局の相互行為に焦点を当てて」(『体育学研究』、東京大学教養学部体育研究室、2008年、所収)、326頁。
- (21) 同上。

第二章 慶應義塾における部活動

第一節 草創期—自主活動の時代—

慶應義塾においては 1892 (明治 25) 年に体育会が発足する以前から各種スポーツ団体が存在していたが、これは福澤諭吉が近代的な学校教育における人間形成の一助として、スポーツの重要性をいち早く認め、義塾初期から西洋流の体育思想を取り入れた結果であると言われている⁽¹⁾。福澤諭吉が著した『西洋事情』(初編巻之一)では、西洋の学校のことを紹介している箇所に、

学校の法は最も厳正なり。教授の間、言語せず親指せず。法を犯す者は罰あり。然れども間時は随意に遊そぶを禁ぜず。是がため学校の傍には必ず遊園を設て、花木を植へ、泉水を引き、遊戯奔走の地となす。又園中に柱を立て梯を架し綱を張る等の設をなして、学童をして柱梯に攀り、或は綱渡りの芸をなさしめ、五禽の戯を為て四肢を運動し、苦学の鬱閉を散じ身体の健康を保つ⁽²⁾。

とある。福澤諭吉が西洋流の体育思想を慶應義塾の教育に取り入れた例としては、芝新銭座時代における義塾の規則書の中に、「午後晩食後は、木のぼり、玉遊等、ジムナスチックの法に従ひ種々の戯いたし、勉めて身体を運動すべし」と書かれていたことが挙げられるだろう⁽³⁾。また、慶應義塾が芝新銭座にあった頃は構内にブランコやシーソー、鉄棒などの運動用具があり、福澤諭吉は学生を伴って遠足に行くこともあった。1871 (明治 4) 年に三田に移転してからは、福澤諭吉が発疹チフスにかかったことを発端として、福澤諭吉自ら乗馬、居合、米つき、散歩など絶えず散歩を怠らなかつた。学生にも運動を奨励し、種々の機械道具を構内に備えたり、専門家を雇って学生に運動を教えたりもしていた。

この三田移転ののち、様々なスポーツが新たに加わった。その中からいくつか例を挙げると、1877 (明治 10) 年頃、学生の有志が集まって、紀州藩士の田宮某を招き剣道を、同藩士の関口柔心に柔道を学び、1887 (明治 20) 年には講道館柔道を開始した。その後それぞれ剣道会、柔道部と組織化した。柔道、剣道はともに福澤諭吉が奨励したのもであった。これらと同時期に器械体操が取り入れられ、1878 (明治 11) 年には弓術部が発足した。

さらに、『慶應義塾野球部史』によれば、1884 (明治 17) 年頃に初めて語学教師であったアメリカ人ストーマー (経歴不詳) から野球の教授を受け、1887 (明治 20) 年ごろになると塾生の中で野球を試みるものが非常に増加したとのことである。またアメリカ留学中にベースボールを習得した平岡濤⁽⁴⁾が 1882 (明治 15) 年に鉄道局構内の芝浦寄りに本式のグラウンドを作り上げ、これが「新橋クラブ」の本拠となっていた。平岡が慶應の連中も連れて来いと言ったため、数名の塾生が彼の指導を受けた。これが 1886 ~ 1887 (明治 19 ~ 20) 年頃のことであった。この頃青山英和学校と試合をしたのが最初で、高等商業学校や、学校が近所である明治学院大学などと試合をしていた。部の発足は公式には、アメリカから帰国して新たに入会した岩田伸太郎⁽⁵⁾が野球を大いに奨励したために三田ペー

スポーツ倶楽部が組織された、1888（明治21）年としている。

『慶應義塾五十年史』によれば、1887（明治20）年頃から漕艇が行われ始めたと言われているが、慶應義塾体育会端艇部より発行された『百年のあゆみ』によれば、1889（明治22）年4月に塾生の森村開作らが芝浦で四艘の端艇で練習したのが端艇部の始まりで、「慶應義塾端艇倶楽部」として創立されたとのことである。

三田移転から体育会が発足するまでの様子について、『慶應義塾柔道部史』によれば「塾に体育会の設置されたのは明治二十五年のことであるが、これより先、塾内に各種のスポーツ団体があったことはいふまでもない。蓋し塾にありては、体育会が設けられて種々のスポーツが興ったのではなくして、塾祖の奨励により学生の自由なる選択採用の下に、種々のスポーツが発生し、発達したのであるから、此等を統一して規律あらしめんが為に、体育会が生れたのであった」⁽⁶⁾とのことである。したがって、1892（明治25）年の体育会発足までは、各運動部を統括するような会は存在していなかったと考えられる。

ところで、福澤諭吉がこのように体育を重要視していたにもかかわらず、前述したような体育活動が正課ではなく課外活動として行われていたのは、何故なのだろうか。このことに関して、1893（明治26）年3月23日付の『時事新報』に掲載された「体育の目的を忘るゝ勿れ」という題の記事が興味深い。この記事で福澤諭吉はまず、教育は知識だけでなく運動による身体の発達も大切であり、近来は学生が体育を重んじる風潮が生じていることは喜ばしいが、体育本来の目的を常に忘れないでいてほしいと述べている。その目的については以下のように記されている。

あたかも人生に体育の必要なるは何故なるかと尋るに、身体を練磨して無病壯健ならしむれば随て精神も亦活発爽快なる可きは自然の法則にして、身心ともに健全なる者は能く社会万般の難きを冒して独立の生活を為すことを得るの利あるが為のみ。即ち体育は人をして不羈独立の生活を得せしむるの手段なればこそ之を忽にす可からざることなり。然るに今日世間の体育熱心家を見るに、大概皆身体発育の一事を以て人生の大目的なりと心得、苟も腕力抜群の称を得れば則ち能事終れりと為すの情なきに非ず⁽⁷⁾。

そして福澤諭吉は、体育は単に立身出世の一手段に過ぎないのであって、体育を人生の目的としてしまうことは、目的と手段を混同してしまっていると言わざるを得ないと述べ、以下のようにも述べている。

元来書生に腕力の不用なるは、恰も力士に学問のなきと一般なれども、唯如何にせん、学理上肉体と精神との間に密接なる関係ありて、身体を健かにせざれば、智識を進ること能はざるを以て、已むを得ず学校に体育の設もあることなり。然るに書生の輩が体育を口実として漫に遊戯に耽り学業を怠り、剩さへ肉体の強壯なるに任せて有りとあらゆる不養生を行ひ不品行を働き、独り得得たるが如きに至ては、言語道断の次第と云はざるを得ず⁽⁸⁾。

したがって慶應義塾の学生に対しても、体育活動によって身体を健康に保つことが学業に励む際に必要であるから体育を奨励しているのもあって、体育活動を正課にはせず課外活動という正課に対する副次的な位置付けに留めたのではないだろうか。

第二節 定着期—「体育会」の発足—

慶應義塾の体育会が発足するのは1892（明治25年）5月25日である。体育会が発足する以前から義塾内には各種スポーツ団体が存在していた。塾生の中でスポーツが盛んになってきたため、「義塾の当局者、先輩、塾生の中に、これらの運動団体を統一し、組織的にさらに発展させる必要が感じられるようになり、明治25年5月に至って、ついに「慶應義塾体育会」が発足した⁽⁹⁾」のである。また、体育会の発足には「全塾生の健全なる身体の発育をめざし⁽¹⁰⁾」ていた面もある。

体育会発足の時点では会長の福澤捨次郎のもと、剣道、柔道、野球、端艇の4部を統合し、弓術、操練（兵式体操）、徒歩の3部を加えた7部が設けられた。会員については、「大学部、普通部（のち大学、高等部、普通部、商工学校）の学生・生徒を会員とし、体育会費を徴収した⁽¹¹⁾」とのことである。会員は何種類でも各自の好むところに従って入部を自由に選ぶことができた。

体育会の発足にあたり、「運動倶楽部設立の為、創立及び基本金壹千金を出資し、之が経費として学生一般より毎月拾銭づつ納めしむる事。但し運動倶楽部規則は別に之を定め而して之までの春秋2回の運動会を催さしむ事⁽¹²⁾」との記述が1892（明治25）年5月15日の義塾評議会の記録に示されていることから、慶應義塾側からの体育会に対する期待がうかがえる。

体育会が発足した時点で体育会に加入していた7部に加えて、1901（明治34）年に庭球部、明治35年に水泳部、自転車部、蹴球部、器械体操部が体育会に加入した。ただし1895（明治28）年頃に徒歩部、1899（明治32）年に操練部が廃部になり、1902（明治35）年に体育会に加入した自転車部も加入後一年に満たないうちに廃部となった。

体育会は柔道部、剣道部、弓術部、端艇部、水泳部、野球部、蹴球部、庭球部、器械体操部の9部での状態が1917（大正6）年に競走部が体育会に加入するまで続いた。1919（大正8）年に相撲部、山岳部、ホッケー部が、1922（大正11）年には馬術部が入会し、2016（平成28）年度現在までに43部が体育会に加入している。

さて、『慶應義塾史事典』によれば体育会は「常に学問との両立を図りながら、慶早野球戦をはじめとするそれぞれのスポーツの歴史に残る名選手、名勝負を生み、わが国における学生スポーツの指導的役割を果たしてきた⁽¹³⁾」とのことである。以下では体育会の具体的な活動について見ていきたい。

慶應義塾では全塾的行事として運動会（当初遊戯会と呼ばれていた）が1886（明治19）年から春秋2回行われていた。1889（明治22）年になると運動会は年に1度となり、春に行われていたが、体育会が創設されてからは体育会が運動会を引き継ぎ、運動会は「種目にも改良が加えられ、内容も充実、東京名物の一つと呼ばれるほどの行事へと発展した」

⁽¹⁴⁾と称されるまでになった。1893（明治 26）年になると官公私立学校 の招待レースが種目に加えられた。このころから慶應義塾の運動会は都下の名物として人気を博し、雑誌『風俗画報』にも「慶應義塾大運動会」との題の下、絵入りで競技内容を紹介した記事が掲載された⁽¹⁵⁾。1895（明治 28）年頃には見物人はおよそ 1 万人 を超えるほどにまでなったという⁽¹⁶⁾。一方、水上運動会（体育会競漕会）について『慶應義塾百年史中巻（前）』を参照すると、最初の水上運動会は 1892（明治 25）年 10 月 16 日に袖ヶ浦で行われ、春の陸上運動会と同様に賑やかに行われたという。その後端艇部はボートを新調したり 1898（明治 31）年に艇庫を新しく竣工したこともあり、部員数が増え、ますます水上運動会は賑やかになった。水上運動会は幼稚舎生から大学生までが参加する全塾的行事でもあった。

また、体育会各部の活躍が増すにつれて一般学生の体育施設利用が困難になったことから、1930（昭和 5）年に体育会は塾内対抗競技部を設けて、一般の学生の運動競技参加を促す機会を作った。この部は塾内競技団体の活動援助を目的としていた。

これらの活動のように、体育会は学生一般に対する活動も行っていた。では、体育会各部の活動はどのようなものであったのか。主要な部活動の活躍について体育会発足後の様子を見ていきたい。この研究では体育会に初期の頃から体育会に加盟している柔道部、端艇部、野球部、蹴球部を取り上げることとした。柔道部は塾生の中で最も早く組織が作られた部の 1 つであり、日本古来の競技であることから取り上げることにした。柔道部に関する記述は、主に『慶應義塾柔道部史』（三田柔友会、1933 年）、『慶應義塾柔道部史第二巻』（三田柔友会、1978 年）を参考にした。端艇部、野球部は外来の競技であるが体育会発足以前から組織が作られ、体育会の中でも歴史が長い部である。特に野球部は現在でも早慶戦が華々しく行われている部でもある。よってこの 2 部も取り上げることにした。前者に関しては、『百年のあゆみ』（慶應義塾大学体育会端艇部・三田漕艇倶楽部、1989 年）を、後者については『慶應義塾野球部史』（慶應義塾体育会野球部、三田倶楽部、1989 年）を主に参照した。さらに蹴球部は体育会加盟が 1903（明治 36）年と、体育会発足から約 10 年の遅れをとったものの、慶應義塾が日本ラグビーのルーツ校であり、日本ラグビー普及において重要な役割を果たしたと考えられる点から取り上げることにした。蹴球部に関しては主に『慶應義塾体育会蹴球部百年史』（慶應義塾大学出版会、2000 年）を参照して記述した。

第一に柔道部である。『慶應義塾柔道部史』によれば、体育会が発足した 1892（明治 25）年に演説館の西側に道場が新築された。剣道部と共同して使用しており、剣道部の練習が終わった午後 5 時から練習を行った。体育会に入会してからは部員の等級が設けられ、寒稽古、大会、紅白試合などの年中行事も始まった。当時は幼稚舎生も柔道に取り組んでおり、柔道部の上級生は交代で幼稚舎生の指導にあたった。明治 32 年には部員も 200 名に達し盛況であった。1897（明治 30）年ごろから他校の試合に部員が出場することも始まった。

第二に端艇部であるが、1892（明治 25）年に体育会が発足すると慶應義塾端艇倶楽部が端艇部としてこれに加入した。体育会設立規則を受けて、端艇部は秋の水上運動会を開催することとなり、第一回水上運動会が芝浦・袖ヶ浦で開催された。このころは対外レース

ではなく、塾内水上運動会であった。当時の端艇部はレッド倶楽部、大和倶楽部、大学ボート倶楽部（いずれも 1893（明治 26）年設立）の 3 団体で構成されていたが、1899（明治 32）年に端艇部に一体化された。艇庫は芝浦にあったが、明治 30 年代に向島に移った。これに伴って水上運動会の会場も 1902（明治 35）年に芝浦から隅田川に移った。

第三に野球部である。野球部は 1892（明治 25）年の体育会発足時からこれに加入している。体育会ができてからは各自が費用を出さずとも学校の方で出してくれることになったという。これはそれまではチームというよりクラブとしていた野球部に、チームらしいものが組織された要因にもなったとされている。体育会が発足した 1892（明治 25）年頃の部員は数十人であり、この頃野球は大いに流行し、童子寮⁽¹⁷⁾にもクラブが出来た。練習場所は稲荷山の下で慶應義塾のグラウンドであったが、このグラウンドは細長い菱形の地形であったため、他校との試合前は近隣の薩摩原や仙台原などへ行って練習していた。

第四に蹴球部である。1899（明治 32）年の秋に麻布台仙台ヶ原で慶應義塾におけるラグビーが始まったとされている。同年 1 月に慶應義塾大学理財科の英語科教師として採用されたエドワード・ブランウェル・クラーク (Edward Branwell Clarke, 1874-1934) が、ケンブリッジ大学でともにラグビーに親しんでいた彼の友人である田中銀之助⁽¹⁸⁾ に協力してもらい、塾生たちにラグビーを教授したのである。クラークと田中銀之助の両者は、ケンブリッジ大学に学びながらラグビーに親しんでいたという経歴を持っていた。クラークは「私が慶應義塾の私のクラスにラグビーを紹介したのは、彼らが晩夏から冬にかけて屋外で何もすることがないように見えたからです」⁽¹⁹⁾ と書簡の中で述べている。1901（明治 34）年 12 月には慶應義塾と YC&AC (Yokohama Country & Athletic Club)⁽²⁰⁾ との間で試合が行われた。この試合は「日本国内で初めて試合を行ったのは事実であるばかりか、ラグビー試合の第一戦が国際試合だった点に大きな意義がある」⁽²¹⁾ と蹴球部百年史に記されている。

その後 1903（明治 36）年になってそれまでに生まれていたバーバリアンと敷島の二つのクラブチーム統合による蹴球部が正式に発足した。この年に慶應義塾は三田綱町に運動場用地を購入し、綱町グラウンドで練習ができるようになった。また慶應ラグビーが蹴球部となって初めて YC&AC に試合を挑んだ。1904（明治 37）年に入ると、綱町グラウンドで初の塾内ラグビー大会も行われた。

ところで、蹴球部の大きな目標にはラグビーの普及活動があったという。1904（明治 37）年ごろから学習院、第一高等学校でもラグビーの練習が行われていたと、1905（明治 38）年 5 月 20 日付の時事新報に記されていた。学習院は田中銀之助の母校であり、一高はクラークがかつて教鞭をとっていた学校でもあり、彼らがラグビーを教えていた可能性も考えられうる。また当時の蹴球部員であった田辺九万三のメモには、学習院からラグビーを習いに来た者がいたことや、一高へエキシビジョンゲームを行いにいったことが記されていた⁽²²⁾。しかし両校がラグビー史に登場するのはずっと後になってからであった。だが 1910（明治 43）年に、当時の蹴球部員であった真島進が第三高等学校に通っていた従兄弟にラグビーを教えたことがきっかけで、三高にもラグビー部が創立されたと言われている。真島は慶應義塾蹴球部が編纂した『ラグビー式フットボール』をもとに三高のラグビー部

指導に当たった。その後も三高はボールの不足や練習中の不可解な点について慶應に問い合わせ、慶應側はこれに応じ三高のラグビー部の発展に寄与した。1911（明治 44）年には三高との定期戦が始まった。

以上、体育会発足時の体育会の様子をいくつかの部を取り上げて概観してきたが、体育会について語る上で忘れてはならないのが、寄宿舎の存在である。寄宿舎については主に『慶應義塾史事典』を参照した。寄宿舎は慶應義塾または義塾関係者により教員・学生のために用意された宿舎で、初期の慶應義塾では学生はおおむね塾内に寄宿していたという。三田に移転してからは旧島原藩邸の一部を寄宿舎として利用していた。1883（明治 16）年ごろからは構内に「酒井寄宿舎」と呼ばれる、幼稚舎の課程を終えて慶應義塾へ進んだ、比較的年少の者を対象とした私家寄宿舎もできた。しかし 1888（明治 21）年ごろから学生が急増し、収容しきれなくなってしまうため、下宿する者も多かった。下宿生が増えたことで、学生の規律の乱れなどが問題となり、1899（明治 32）年に新たな寄宿舎の建設を決定し、翌年三田山上北側に新寄宿舎が完成した。「修身要領」より名前をとって、友愛寮、清交寮、自信寮、自重寮、進取寮、確守寮と呼ばれた。

慶應義塾においては寄宿舎は徳育の場ともなっており、寄宿舎生は常に義塾をリードする存在でもあった。学生の間で起きた各種の運動、革新機運の中心となったのも寄宿舎生であった。1900（明治 33）年に新寄宿舎ができた頃の、寄宿舎における体育活動に関しては、「午後二時より晚餐に至る間を放課時間とす。此時間こそ学生等が一日の労を慰する最も楽しき時間にて、野球（ベースボール）、蹴鞠（フットボール）、ローンテニス、大弓、柔道、撃剣、端艇等夫れ々々の遊戯を試み、或は筈を郊外渋谷目黒辺に曳き自然と親しむ者もあり。各好むところに従ひ運動する様余所の見る目も楽しげなり」⁽²³⁾との記述が『慶應義塾学報』に掲載された。

明治 30 年代後半から明治 40 年代前半にかけて慶應義塾に在籍した照井伊豆という塾員の証言によれば、当時の寄宿舎には体育会の学生が大勢いたということである⁽²⁴⁾。寄宿舎の収容人数は 400 名で、常時 370 ～ 380 人が入舎していたとも述べている。端艇部であったこの塾員は、寄宿舎の他の端艇部員と共に朝早起きして芝浦までボートの練習に行っていたそうだ。

また蹴球部の百年史を参照すると、慶應義塾においてラグビーが広まっていった要因の一つとして塾生たちの寄宿舎生活が挙げられている。「新入生は大学、普通部を問わずほとんど全員が入寮。ここでの生活が塾生たちにスポーツの世界へのめり込ませていったようにうかがえる」⁽²⁵⁾と記されている。1907（明治 40）年に入寮したある塾生は、同じ寄宿舎の上級生で体育会蹴球部、端艇部に入っていた者が多かったため、好むと好まざるとに関わらずボートとラグビーをやらねばならなかったと述べている。寄宿舎制度が仲間を引き入れるにも、その脱落を防ぐにも非常に好都合であったとも言われている⁽²⁶⁾。

第三節 発展期一対外試合の普及と競技団体の成立一

この節では、対外試合が始まった頃から各種競技団体が成立していく過程について論じていきたい。

第一に柔道部である。柔道部は前節でも示したように、1897（明治 30）年ごろから他校の試合に部員が出場することが始まった。1899（明治 32）年 5 月に第一高等学校の試合に慶應義塾の柔道部員が出場した記録が残っている⁽²⁷⁾。1902（明治 35）年になると京都遠征や第 1 回対早稲田大学柔道試合が行われた。京都遠征については、「我が柔道部の発達を健全ならしめ、部員の活動力を旺盛ならしむるには、外部との対校試合を敢行して、士気を鼓舞すると共に、部員の団結を鞏固ならしめなければならぬといふ議論が、此の頃旺んになつて来た。その具体化されたのが京都遠征であつた」⁽²⁸⁾と記されている。京都遠征では三高と対戦した。それまで講道館やその他の諸学校の大会に部員を派遣することはあつたが、この様に部員をあげて他校へ対戦しに向かったのはこれが始まりであつた。この京都遠征の後、さらなる強敵と一戦を交えたいとの部員の思いが高まり、その好敵手として早稲田大学が見出され、同年に第 1 回対早稲田大学柔道試合が行われるに至った。

京都遠征や早稲田大学との試合の他にも他校との関わりは多数見られる。たとえば 1903（明治 36）年には、外国語学校や東京高等師範学校、東京帝国大学へ、1904（明治 37）年には獨逸協会学校や高輪仏教中学校大会へ、1910（明治 43）年には東洋協会大会、高等師範学校、外国語学校、獨逸協会、早稲田大学、東京美術学校、日本大学の大会へ部員を派遣したり、1906（明治 39）年に東京高等商業学校と、翌年に東京帝国大学と試合をしている⁽²⁹⁾。1912（大正元）年からは当時の飯塚国三郎師範⁽³⁰⁾のもと日蓮宗大学（現在の立正大学）、水産講習所、高等工業学校、東京農業大学の 4 校連合軍と第 1 回紅白試合を行った。これらの 4 校は飯塚先生を師範としていた学校で、慶應義塾柔道部の弟分のような存在であり、4 校連合試合は 1932（昭和 7）年まで続けられた。こうした部員派遣や対外試合はその後も行われ、講道館が主催する大会への選手派遣や地方遠征もたびたび行われた。

1938（昭和 13）年に、ドイツ・イタリア派遣親善武道学生団に慶應義塾の柔道部員が選ばれた。同年には第 1 回アメリカ遠征も敢行された。飯塚師範の引率のもと国技柔道を紹介し、両国の親善に努めた。次なるアメリカへの遠征は 1963（昭和 38）年まで行われなかった。

しかし 1945（昭和 20）年 12 月、GHQ 指令により学校柔道が禁止された。これに伴って慶應義塾体育会柔道部も一時解散となった。1948（昭和 23）年に解除されるまで部員は三田柔友会の客員として校外柔道クラブを組織し、飯塚国三郎が戦後に設立した道場である至剛館などで稽古に励んだ。1950（昭和 25）年になって学校柔道が復活し、柔道部も体育会に復帰した。

ところで、慶應義塾体育会柔道部と他校の柔道部を統括するような組織があつたのかということについては、柔道部史などを参照してみたが、戦前期については明確な記述が見当たらなかつた。講道館が主催する大会への出場や、各校柔道部と直接交渉していただろうか。戦後になると前述したように学校柔道が GHQ により禁止されてしまう。『柔道の歴史と文化』を参照すると、1946（昭和 21）年には大日本武徳会⁽³¹⁾が依然として軍国主義的団体としての建前を取っているとの指摘により解散させられたという。このことにより、柔道の全国的な組織は 1920（大正 11）年に創始された講道館柔道有段者会

が唯一のものとなった。そこで講道館の段の有無を問わずに全柔道愛好家を含む団体を作ろうとする機運が持ち上がり、1949（昭和 24）年に全日本柔道連盟が結成された。この連盟は学生を対象とした大会も主催していて、慶應義塾もその大会に出場している⁽³²⁾。

1983（昭和 58）年には全日本学生柔道連盟が全日本柔道連盟の態度を不服としてこれから脱退した為に、全日本柔道連盟に所属する全日本大学柔道連盟が新設され、二つの学生組織が存在していた。しかし 1988（昭和 63）年になると二つの組織がの一本化を経て、現在慶應義塾の柔道部も加入している「財団法人全日本学生柔道連盟」が本格的に誕生した。また、この他にも 1951（昭和 26）年には、東京学生柔道連盟が結成され、合同稽古に慶應義塾柔道部も参加している⁽³³⁾。同年には関東学生柔道連盟結成大会記念紅白試合兼学生柔道東西対抗予選にも出場し、東京大学や早稲田大学、日本大学など数々の大学に在籍する選手らと対戦している⁽³⁴⁾。

第二に端艇部である。1905（明治 38）年に第一回早慶レガッタが慶應の水上運動会の対外競技として行われた。しかし翌年の 1906（明治 39）年に後述の野球の早慶戦中止騒ぎがあり、学校当局は早稲田大学との試合を禁止し、1930（昭和 5）年に復活レースが開催されるまで早慶レガッタは中断された。対外レースも 1921（大正 10）年まで中止された。

大正時代に入ると、東大漕艇部により日本で初めてシェル滑席艇が導入された。ボートを国際水準に向上させるためにはシェル滑席艇への移行は急務であったという。1919（大正 8）年に、東大と早稲田がシェル滑席艇で行ったレースによりボート熱が高まって滑席艇が流行したことを受け、1920（大正 9）年には日本漕艇協会が設立された。この協会には東京帝国大学、早稲田大学、明治大学、東京商科大学、東京高等工業学校、東京外国語大学、東京高等師範学校の 7 校が加盟した。慶應義塾は学校当局から対抗試合を禁止された状況にあったため、日本競漕に加盟すれば対抗試合禁止のきっかけともなった早稲田大とのレースもありうるということで、この年に加盟することは許されなかった。それ故、同年の第 1 回選手競漕大会では東大が優勝したが、慶應義塾はこれには参加できず、横浜の外国人チームである「横浜アマチュアローイング・クラブ」番外レースを行った。1921（大正 10）年には対外試合の許可が下り、インターカレッジに出場するようになった。昭和に入ってからは「対校選手団」が確立し、1928（昭和 3）年に全日本選手権大会で早稲田大学とともに決勝に進出するまでになった。これがきっかけとなって、1930（昭和 5）年に早慶レガッタは復活を見た。

1932（昭和 7）年に行われたロサンゼルスオリンピックには、慶應義塾の端艇部から舵手付フォアを派遣した。1937（昭和 12）年に日中戦争、1941（昭和 16）年に太平洋戦争が始まり、1943（昭和 18）年になると学徒出陣で出征していく部員もいた。そんな時代背景のある中、1944（昭和 19）年に「幻の早慶レガッタ」と称されるレースが行われた。これは勝敗やタイムは分かっていない非公式なレースである⁽³⁵⁾。このレース以降、終戦まで部活動は自然停止となった。1946（昭和 21）年にインターカレッジが復活し、翌年には早慶レガッタも復活した。1951（昭和 26）年に全日本選手権競漕大会エイトにおいて優勝し、翌年のヘルシンキオリンピックには再び義塾の端艇部員から舵手付フォアが派遣された。

第三に野球部である。対外試合について、1897（明治 30）年までの試合記録は明らかではないものの、1893（明治 26）年には一高と試合を行った記録が『第一高等学校野球部史』に残っている。1901（明治 34）年には東海道遠征を行い、浜松中学、静岡中学、愛知県第一中学校、第三高等学校と試合をした。この遠征は塾員篤志先輩からの寄付や初代体育会会長を務め時事新報社長であった福澤捨次郎の後援を受けてのものだった。以後毎年遠征を行っている。このほかにも、1900（明治 33）年に初めて横浜に遠征して外人のアマチュア倶楽部と試合をした。

1903（明治 36）年の秋になると、早稲田大学野球部から試合の申し込みがあり、試合を行うことが決まった。このことは当時の塾当局や部長に報告されたが、学生自治の方針のためにあまり面倒な手続きはなかったという。第 1 回早慶戦は 11 月 21 日に決行されたが、この時は体育会の一部の試合という程度で、両校とも現在のような対校意識は燃えなかった。1904（明治 37 年）あたりになって両チームの実力が伯仲し、試合数も増え、新聞にも取り上げられるようになると、ファンも熱狂するようになっていった⁽³⁶⁾。第 1 回早慶戦を機に、春秋二季に一回ずつ試合を行うことが当事者間の間で取り決められた。当時の部員によれば、第 1 回早慶戦に先駆けて、「イギリスのオックスフォード、ケンブリッジの対抗戦を真似して、帝大と年に二、三回の対抗戦をする理想を持っていたのですが、この後で早稲田に野球部ができて、早慶戦が始まり、この話も立ち消えになってしまいました」⁽³⁷⁾とのことである。だが早稲田大が慶應に試合を申し込んだのも、外国の事例を参酌しての企画であったとされている。人々の注目を集めるようになった早慶戦であるが、明治 39 年に中止されてしまう。試合前日に応援団の無節制から不測の事態が起こることが危ぶまれ、万が一のことが起こりそうな状態では教育者の職責上、中止にするほかないとの見地から慶應から試合中止の申し込みがあり、早慶戦は中止となった。早慶戦は 1925（大正 14）年まで中断された。

1907（明治 40）年になり、秋に慶應義塾はハワイの野球チームを招待し、試合を行った。このことによって早稲田大学が渡米して習得した野球の科学的研究、規則の新解釈が一層具体的なものとなった。またこの時来日したハワイのセントルイス大学は我が国初の外来チームでもあった。翌年にはハワイからの招待で、野球部創設以来初の海外遠征を行った。その後早稲田大学の渡米に引き続いて慶應義塾野球部も、1911（明治 44）年には第 1 回、1914（大正 3）年には第 2 回アメリカ遠征を行っている。また、1912（明治 45）年には来日したマニラ駐在のアメリカ軍チームとの試合を行った。さらに 1913（大正 2）年には大リーガーが来日し、慶應野球部も彼らのコーチを受けた。このように国際試合や外国人選手との交流がもたれるようになっていった。

その一方で 1914（大正 3）年に慶早明三大学リーグが成立した。1917（大正 6）年に法政大学が、1921（大正 10）年に立教大学が、1925（大正 14）年に東京帝国大学がこれに加わり、六大学野球リーグへと発展していった。なお前述のように、早慶戦は 1925（大正 14）年に復活するまで行われなかった。戦時下の 1943（昭和 18）年に東京六大学野球連盟は一時解散となるも、1946（昭和 21）年に再建され現在へと続いている。

第四に蹴球部である。前述したように 1911（明治 44）年に三高との定期戦が始まった

が、1922（大正 11）年になるとラグビーにおいても早慶戦が実現する。もともと早稲田の法式蹴球部は 1918（大正 7）年に創設されていたのだが、4 年間無為なシーズンを送らざるをえなかった。これも 1906（明治 39）年の野球の早慶戦中止からの両大学のスポーツ交流禁止の余波と言えるだろう。ラグビーの早慶戦が実現する出発点については、諸説あり、正確なことはわかっていない。早慶ラグビー定期戦は、OB の親睦のための組織である A.J.R.A. (All Japan Rugby Association) ⁽³⁸⁾ の主催のもとで行われた。

1924（大正 13）年には A.J.R.A. が母体となって関東ラグビー蹴球協会が関東地区の統括機関として設立された。初代会長は田中銀之助で、慶應 OB も役員に名を連ねた。理事会の下部機構である委員会には慶應義塾の学生が委員として参加した。慶應義塾のほか早稲田大学、東京帝国大学、東京商科大学、明治大学の 5 校関係者により理事会や委員会は構成された。この協会はルール解釈の調整や日程の調整、早慶定期戦の入場料徴収問題の解決などの役割を果たした。1926（大正 15）年には関東、西部 ⁽³⁹⁾ 両地域協会に続いて日本ラグビー協会が成立した。名誉会長の一人は田中銀之助である。イギリス及びフランスの 5 カ国対抗にならば、選抜チームによる東西対抗戦を設けた。1928（昭和 3）年になると慶應義塾を中心に定期戦形式で行われてきた大学ラグビーが、定期戦を兼ねたまま 5 大学対抗戦へと移行した。加盟校は慶應義塾、早稲田大学、東京帝国大学、明治大学、立教大学であった。1933（昭和 8）年からは東京商科大学、法政大学の 2 校が加わり 7 大学対抗戦となり、1942（昭和 17）年の秋季大会まで続いた。

1925（大正 14）年に慶應義塾蹴球部が上海に遠征し、上海の外国人チームと試合をした。1911（明治 44）年に日本チームとして三高と対戦して以来、無敗を続けていた慶應義塾蹴球部の目が海外に向いたのは当然の結果であると蹴球部史にはある。この海外遠征は日本ラグビー初の海外交流となった。なお、対戦した相手チームの選手の国名は明記されていなかったが、当時の上海には租界が存在し、イギリス人も居住していたことから、上海にイギリス人のラグビーチームがあったのではないかと推測される。1930（昭和 5）年にはカナダ・ラグビー協会の招きで初の日本代表の海外遠征が実現した。日本ラグビー協会から派遣された日本代表の中には慶應義塾の選手も選ばれた。戦後の 1947（昭和 27）年にラグビー創始国であるイギリスからオックスフォード大学のチームが、1948（昭和 28）年にはケンブリッジ大学のチームが来日し、慶應義塾と対戦している。

まとめ

以上、慶應義塾における部活動の発達の様子を概観してきた。ここから、慶應義塾の部活動の歴史は、慶應義塾の創設者である福澤諭吉の思想に始まると言えるだろう。第一節で示したように、人間形成の一助として体育を重視していた福澤諭吉は、西洋の視察経験から西洋流の体育思想を積極的に慶應義塾の教育の中に取り入れた。彼が体育を奨励し、自ら率先してスポーツ活動を実践したことにより、義塾内に体育に親しむ風土が培われたのだろう。慶應義塾が三田へ移転してからはスポーツの種類も増え、学生有志の活動も見られ始めた。福澤諭吉が奨励していた柔道・剣道では、有志の学生が集まって紀州藩士の教えを乞うたり、端艇においては有志の学生が漕艇を試みたことから部の歴史が始まった

りしている。このほかにも、外国人教師や海外留学経験者の影響により発展したスポーツもある。野球は外国人教師のストーマーや、アメリカへの留学経験があった平岡瀬らの教えによって発展していった。ラグビーも外国人教師であったクラークとその友人の田中銀之助らによって塾生にもたらされ、日本ラグビーのルーツ校として発展していった。

塾生の中で体育活動が盛んになってきたために、各スポーツ団体を統括する組織として、1892（明治 25）年には慶應義塾体育会が発足した。第二節で示したように体育会は運動会の開催などを行うと同時に、新しい部活が加わったり、体育会所属の各部の活動がますます盛況になっていったりしていた。部活動の発展の要因としては、体育会という慶應義塾公認の組織が作られたことその他に寄宿舎の存在があったと言えるだろう。前述したように、寄宿舎は体育会の塾生が数多くいたことなどにより、新たな部員を引き入れることや部員が退部することを防ぐのに役立っていたのである。

体育会の発足後、徐々に他校との試合が増加していく。そしてそれらをまとめるような競技団体も整えられていった。第三節にあるように、柔道部では第一高等学校や早稲田大学をはじめとした都内の学校との試合に加え、京都遠征や講道館での大会に出場するなど、数多くの試合記録が残されている。戦後は GHQ による一次的な学校柔道の禁止を経るも、全日本柔道連盟の成立を皮切りに、全国の柔道を統括する組織が作られていった。端艇部も 1905（明治 38）年に早慶レガッタが始まり、日本漕艇協会が 1920（大正 9）年に成立すると、その翌年からこれに加入し、インターカレッジへ出場している。野球部はチームが作られたころから対外試合を行っていた。1903（明治 36）年には早慶戦が始まったが、早慶戦はあまりの熱狂ぶりに、1906（明治 39）年には学校当局から試合が禁止されてしまった。早慶戦の禁止は 1925（大正 14）年まで続いたが、その一方で 1914（大正 3）年に慶早明三大学リーグが成立し、1925（大正 14）年に至り、今日も続く六大学野球リーグへ発展した。蹴球部においては部の成立当初はラグビー部のある学校がなく、横浜の外国人チームと試合を行っていた。日本におけるラグビーの普及にも努め、第三高等学校のラグビー部成立にも寄与したとのことである。1911（明治 44）年には第三高等学校との定期戦が始まり、1922（大正 11）年に早慶戦が始まるなど、徐々に対校試合が増加していった。1924（大正 13）年には関東ラグビー蹴球協会が、1926（大正 15）年には日本ラグビー協会が成立し、日本ラグビーの発展に貢献した。1928（昭和 3）年には大学ラグビーが、5 大学対抗戦へと移行し、1933（昭和 8）年からは 7 大学対抗戦となるなど、対抗試合が活発化した。このように、柔道においては講道館が学校柔道の発達に先立って存在してはいたものの、概ねどのスポーツも対校試合が活発になっていったのち、それらをまとめるような学校外の組織が作られていったとすることができるだろう。またこのことは、日本のスポーツの発展に貢献したということもできよう。

さらに、本研究で取り上げた 4 つの部活は全て外国人チームとの試合または海外遠征を経験している。柔道の場合は日本と外国との親善のために海外へ遠征した。端艇部はオリンピック選手として塾生が国際大会に出場した。野球部はアメリカの軍や大学などのチームと国内外で対戦を重ねた。蹴球部においては初めての試合が横浜の外国人チームである YC&AC との試合であった。その後も YC&AC など外国人チームとの試合は継続して行わ

れ、上海遠征も決行された。大学での部活動が国内だけにとどまらず国外にも及んでいたこともまた、日本におけるスポーツの充実に寄与していたと言えるだろう。

したがって、福澤諭吉が体育を奨励したことを発端として慶應義塾の体育活動が始まり、やがて体育会が作られ、対校試合が活発化していったために学外の競技団体が成立、また外国人チームとの試合や海外遠征も行われるなど、日本のスポーツ界の成長を後押しするまでに至ったという一連の流れを見ることができる。よって、慶應義塾における部活動の発展は日本のスポーツの発展へつながっていたと言えるだろう。

[註]

- (1) 慶應義塾史事典編集委員会『慶應義塾史事典』慶應義塾、2008年、482頁。
- (2) 福澤諭吉／マリオン・ソシエ、西川俊作編『西洋事情』慶應義塾大学出版会、2002年、37頁。
- (3) 慶應義塾『慶應義塾百年史中巻（前）』慶應義塾、1960年、168頁。
- (4) 平岡瀨（1856～1934）は実業家であり、日本野球の創始者と言われている。1871（明治4）年に渡米し、汽車製造会社の勤めながら鉄道技術を学んだ。1876（明治9）年に帰国する際、野球道具を日本へ初めて持ち帰り、伊藤博文の紹介で鉄道局に勤務するようになる。旧田安家の三田綱町の徳川達孝伯一門に英語を教える余暇に、鉄道局の者や私交のある同行者を集めて日本で最初の野球チームである「新橋アスレチッククラブ」を結成した。個人経営の「平岡工場」を興して実業家としても活躍した。日本の野球発展に多大な貢献をしたとして、1959（昭和34）年には読売巨人軍を創設した正力松太郎とともに野球殿堂入り第1号となった。
- (5) 岩田伸太郎は、『慶應義塾野球部史』（慶應義塾体育会野球部・三田倶楽部、1989年）によれば、サンフランシスコ領事の息子で、アメリカに育った。帰国後は慶應義塾野球部員は岩田にコーチを受けたという。しかし、彼に関するその他の経歴については不明である。
- (6) 慶應義塾体育会『慶應義塾柔道部史』三田柔友会、1933年、4頁。
- (7) 福澤諭吉「体育の目的を忘るゝ勿れ」（『福澤諭吉全集第14巻』岩波書店、1961年、所収）、18-19頁。
- (8) 同上、19頁。
- (9) 慶應義塾体育会創立100年記念事業委員会記念誌編集部会編『若き血燃ゆ：慶應義塾体育会百年の軌跡：慶應義塾体育会創立百年記念誌』慶應義塾体育会、1992年、48頁。
- (10) 同上、272頁。
- (11) 前掲『慶應義塾史事典』、482頁。
- (12) 明治25年3月15日第2期第6回評議委員会記録（前掲、『慶應義塾百年史中巻（前）』、169頁）。
- (13) 前掲『慶應義塾史事典』、482頁。
- (14) 同上、428頁。
- (15) 前掲『慶應義塾百年史中巻（前）』、173頁。
- (16) 同上、178頁。
- (17) 幼稚舎ができる以前に慶應義塾に存在した、12歳から16歳の子どもを預かる寮。
- (18) 田中銀之助（1873-1935）は日本ラグビーの創始に尽力した実業家である。学習院に学び、15

- 歳の時にリース校を経てケンブリッジ大学に留学し、ラグビーに親しんだ。帰国後の明治 30 年に田中銀行取締役を務め、大正 2 年田中鋳業を創立し取締役となり、同社繁栄の基礎を築いた。関東ラグビー蹴球協会の初代会長でもあった。
- (19) 慶應義塾体育会蹴球部黒黄会『慶應義塾体育会蹴球部百年史』慶應義塾大学出版会、2000 年、54 頁。
- (20) YC&AC(Yokohama Country & Athletic Club)とは、横浜在住の外国人が設立したスポーツクラブで、スポーツ全般を包含する組織に拡大するとともに、ラグビー、サッカー、野球など欧米からの外来スポーツを取り入れた慶應義塾をはじめとした日本の大学チームと交流し、明治初期のアマチュアスポーツの育成、発展に貢献した。
- (21) 前掲『慶應義塾体育会蹴球部百年史』、98-99 頁。
- (22) 同上、64 頁。
- (23) 『慶應義塾学報』第 32 号、明治 33 年 10 月。
- (24) 三田漕艇倶楽部百周年記念事業委員会編『百年のあゆみ』慶應義塾大学体育会端艇部・三田漕艇倶楽部、1989、36 頁。
- (25) 前掲『慶應義塾体育会蹴球部百年史』、61 頁。
- (26) 日本ラグビー蹴球協会『日本ラグビー史』（前掲『慶應義塾体育会蹴球部百年史』、62 頁 所収）。
- (27) 前掲『慶應義塾柔道部史』、44 頁。
- (28) 同上、68 頁。
- (29) 前掲『慶應義塾柔道部史』、113-114 頁、136 頁、168-169 頁、182-183 頁、197 頁。
- (30) 飯塚国三郎（1875-1958）は柔道家であり、講道館の殿堂入りを果たしている人物である。慶應義塾に学び、1891（明治 24）年に講道館に入門した。以後昇段を重ね、慶應義塾のほか東京高等師範学校や東京工業大学など様々な場所で柔道教師を務め、また私財を投じて至剛館という道場を設立するなど、柔道の発展に寄与した功績が認められ、1946（昭和 21）年には講道館より十段位を送られた。
- (31) 藤堂良明『柔道の歴史と文化』（不昧堂出版、2007 年）によれば、「明治 28 年 4 月に桓武天皇が平安京に都を定めて武徳殿を建てブドウを奨励し、武徳によって世を修めた時から千百年目にあたったことから京都に創設され、その後は古流武術や現代武道の保存と振興に努力を傾け全国規模で発展していった。昭和 17 年 4 月には東条英機内閣は従来の大日本武徳会を改組して、…武道振興と皇国民錬成を図るといふ国家武道の性格を打ち出した」（同書、201-202 頁）組織だった。
- (32) 慶應義塾柔道部史編纂室編『慶應義塾柔道部史第二巻』三田柔友会、1978 年、414 頁。
- (33) 同上、460 頁。
- (34) 同上、474 頁。
- (35) 慶應義塾体育会端艇部「早慶レガッタ」〈<http://keiorowing.sports.coocan.jp/about/soukei.html>〉（最終閲覧日 2017 年 2 月 16 日）
- (36) 前掲『慶應義塾野球部史』、12 頁。
- (37) 同上、6 頁。
- (38) A.J.R.A.(All Japan Rugby Association)とは 1920（大正 9）年の 11 月 3 日に発足したラグビー部 OB のクラブであった。関西ラグビー倶楽部が前年に設立されたことに刺激されて結成された。このクラブは田中銀之助を会長として、多数の慶應 OB に加え三高、同志社の OB が在籍していた。関東にあったラグビー界の中心機関化し、ラグビー協会の前身とみなされるよう

な立場であった。

(39) 西部ラグビー蹴球協会は 1925（大正 14）年 9 月に設立された組織である。関西、九州、朝鮮半島、台湾を統括する組織であり、初代理事長は慶應義塾出身の杉本貞一であった。

第三章 早稲田大学における部活動

第一節 早稲田大学の概要

(1) 学校の由来について

早稲田大学は、もと東京専門学校と称し、1882(明治 15)年 10 月 21 日に開校した。早稲田大学は明治の教育も整備の緒につきかけた時代の設立なので、初めから東京専門学校という正規の名を冠して発足したのであっても、またどこか江戸が余喘を曳いてその面影を全く消滅してはおらず、東京は、トウケイといいトウキョウと呼び、読み方もまちまちなど、専門学校などという舌になじまない新語が続いては、容易に一般の口頭に受け付けられにくかった⁽¹⁾。創立者大隈重信の別邸が東京府南豊島郡早稲田村にあり、また校舎が同郡戸塚村にあったことから「早稲田学校」「戸塚学校」とも呼ばれていたが、最終的には「東京専門学校」と名付けられた。1892(明治 25)年頃には、専門学校の別名として「早稲田学校」と呼ばれるようになった。1902(明治 35)年 9 月に「早稲田大学」と改称し、大学部と専門部を新設したが、制度的には「大学令」(1918 年)によって大学として認可される 1920 年までは、専門学校として位置づけられていた。

大隈重信は、天保 9 年(1838)年 2 月 16 日、佐賀の鍋島家の藩士の家に生まれ、父は砲術長であったが、13 歳の時に死別した。幸い賢母に育てられ、学齢に達して藩校の弘道館に学び、外生寮から、内生寮に移る頃から、騒ぎを起こし放校せられた。

大隈重信が早稲田大学の前身東京専門学校を創立した遠因は、幕末に蘭学より英学に転じ、1865(慶応元)年に長崎に致遠館を設立して書生に英語を教えたことである。その後、明治維新に際し、政治の実際行動に奔走したため学校から離れたが、「明治 14 年の政変」で政府から追放されたことに伴い、1882 年に立憲改進黨を結成し、次いで本格的な私立学校東京専門学校を創設するに至った。東京専門学校の設立計画は、政変の翌年に当たる 1882 年の初頭から立憲改進黨の結成に雁行する形で進められた。東京専門学校は、必ずしもこの政変の結果たまたま設立されたのではなく、大隈重信の念頭にはそれまで常に教育ということが大きな比重を占めていたのであって、この政変は、学校の設立を早める動機になったに過ぎないとされている⁽²⁾。

東京専門学校を改めて早稲田大学と名付けたことについて、2 つの考えを当時の学長である高田早苗が 25 周年式典で述べた文章が残されている。1 つは「東京専門学校の基礎の上に一箇の実用的大学を造らう」、もう 1 つは「其大学に入るの階梯即ち高等予科なるものを設けて中学の卒業の基礎の上に 1 年半の準備教育を与へる、而して中学卒業生は入学試験を施さずして自由に入学をせしめるを云ふ組織を立てる」ということだった⁽³⁾。これらは、なるべく今日における世界の学問の趨勢に基づいて学理を実際に応用させることを方針としたい、実用的な人物を要請するというを目的にしたい、なるべく目的に適切な教育を施すということを方針としたい、という意味が込められているのであった。

(2) 寄宿舎について

創立当時の本校周辺の事情から言って、何を差し置いても地方から上京する者を収容する施設が必要であった。市島謙吉（早稲田大学初代図書館長）の談話によると、

其のときの学校の建物は、今の正門から右に突き当たった木造の二階建ての一棟と、其の裏の長屋建ての一棟とでありまして、長屋の方は専ら寄宿舎に充て、表の一棟は教場でもあり、事務室でもあり、図書室やら教員室やらであつたのです。…寄宿舎は百人ばかりも這入れるやうになつてゐたのです⁽⁴⁾。

という。寄宿舎の設備内容が盛り込まれた「創立準備書類」詳細について、「飯茶碗百五十、椀百五十、中皿百五十箇」等明記されている。収容人員は、市島が言う通り 100 人前後であったが、最初の生徒募集の第 8 項には、「入塾は 120 人を限る」とあるので、この程度の準備は必要であったのだ⁽⁵⁾。

当初、全寮制の目的を以て寄宿舎が開始され、地方から上京する者の大半を収容し、その中から英才を社会に送り出し、功績を修めてきたが、早稲田大学に改称し高等教育機関としての体制の充実を図ってからますますその需要が大きくなったため、設備に限界を感じた。そこで校舎の増築と軌を一にして改造することになり、1903(明治 36)年 5 月、高等予科⁽⁶⁾ 講堂 2 棟・実業学校兼小学部校舎を、従来の寄宿舎敷地に建設するため、鶴巻町(現在鶴巻小学校が建っている地点)に移して新築することになり、12 月、木造 2 階建 439 坪になった。これと共に学寮制度を設けて、監督のもとに有志の設立を許可し、寄宿学生の監督に任せることにした⁽⁷⁾。

大学開設後の寄宿舎は高等予科生だけ入舎を許していたが、38 年から一般学生の入舎を許し、これと同時に、舎生の種痘健康診断を励行し、また宿舎の設備にしても植樹、排水、給水、食堂、浴場を完備し、学生の衛生に一段の意を払った。

1905(明治 38)年 4 月、清国留学生部を設置することが決定したので、これと共に鶴巻町の寄宿舎に隣接して、留学生寄宿舎 2 棟 283 坪 5 合余を増設することになり、留学生 100 名のうち 70 名を第一寄宿舎に、19 名を第二寄宿舎に収容した。ところが 1907(明治 40)年度に入ると、清国留学生の新米が漸次減少し、これに反して一般学生の入舎希望者が増加した。9 月以降清国留学生部寄宿舎を改めて第二寄宿舎とし、この中に清国留学生部寄宿舎を併置することにした。

寄宿舎生が、一般下宿屋の生活をしている学生よりは、風紀その他の点で良好な成績を上げている。そこで、出来る限り寄宿舎の設備を拡大し、多数の学生を収容する方針を採り、その手始めとして、先に個人経営に委ねてきたいわゆる学寮制を廃し、これを直接管理に置いた。このため収容人員は 50 名を増し、1909(明治 42)年 7 月末現在では 300 名に達した。1910(明治 43)年度に入ると、商科舎生のため、並びに舎生全体の便宜を計る目的で、舎内に小規模ながら消費者組合(現在の消費生活協同組合のようなもの)を設けたが、その売上は十分で、所期の目的を達することが出来たため、引き続いて存置することにした。

1912(明治 45)年度には、第二舎の耐久力が乏しいためこれを廃し、第一舎だけを残し

て改善を加えた。その結果、寄宿舎の規模は、事務館 45 坪、倶楽部 52 坪 8 号、ピンポン室 12 坪、食堂 47 坪 5 合、舎生館総 2 階 425 坪、炊事場 22 坪 7 合、浴場 10 坪、洗面場 4 坪 5 合、廊下 55 坪、便所 10 坪、物置 12 坪から成り、舎生の収容定員は 160 名となった。このほか構内の敷地 2850 坪のうち約 600 坪の運動場を設け、庭球のコート 2 面を備えた。また、入舎希望者は必ず校医の健康診断を受けることにして舎内の衛生に留意した。この年の在舎生は、多少の出入があったが、1 月平均 127 名余りであった⁽⁸⁾。

第二節 部活動の成り立ち

1884(明治 17)年、飛鳥山で春季大運動会が行われたが、部名や会名をもつ運動団体が起こしたのは日清戦争のあとのことであった。そして、最初の運動団体早稲田倶楽部の創設は、寄宿生活と密接な関係があり、当時の学生の気風を反映して生まれたものであった。柏原文太郎(26 年英語政治科卒)の回顧録によると、

当時学生の中には、以前県議員をやつて来た者もあり、東京に遊びに来てゐるといふ風があつて、一度校門を出ると紳士だが学生だか解らない風袋をして歩いてをつた。一方…寄宿舎の学生も風規が余りよくなかつた。そこで私は之等の風習をまますには撃剣、柔道その他の運動を盛んにするに限ると考へたので、寄宿舎を中心として早稲田倶楽部といふ 1 つの運動の団体を作つた⁽⁹⁾。

という。

「早稲田倶楽部生」⁽¹⁰⁾と題する一文があり、1895(明治 28)年 4 月 20 日午後 1 時校内で発表会を挙げているのであって、「寄宿舎生文武兼修ノ主旨ヲ履修スル目的トシ、早稲田倶楽部ヲ組織シ、大隈英麿ヲ部長トシ、此日発会式ヲ挙グ」⁽¹¹⁾と明記されている。これらの記事から考えると、柏原の「発案」は記憶違いにすぎないとされている。

倶楽部の創設には、本校寄宿舎の風紀刷新のみではなく、それ以上に大きな目的があった。発会式の設立趣旨や説明に基づき、倶楽部の目的として文武兼備の必要や体育、講師、学生の交誼などを掲げ、それを実践するために「遊戯種目」として、撃剣、相撲、テニス、ベースボールが挙げられた。毎日の昼食および夕食後、日曜日、土曜日の午後などを遊戯時間として、それぞれが好きな種目を選んで運動を試み、また部員全体で遠足を行い、毎月茶話会を開いて部員の親睦を図ることとなった。そうして、早稲田倶楽部について次のような規約が定められた⁽¹²⁾。

名称

本部ヲ名ケテ早稲田倶楽部ト云フ。

組織

部員ヲ分ツテ普通部員及特別賛成部員トス。

普通部員ハ東京専門学校寄宿舎生ヲ以テ組織ス。

特別賛成部員ハ本校ニ縁故アル士ヲ以テ組織ス。

本部ニ部長一名、委員長一名、委員八名ヲ置ク。

目的

体育ヲ盛ニシ徳義ノ実践窮行ヲ重ンズ。

決議事項

- 一、会費トシテ毎月金五銭部員ヨリ徴収ス。
- 一、遊技具ハ、寄付金ヲ以テ之ヲ購フ。
- 一、本校寄宿生トナルモノハ、当然部員トナルノ権利義務ヲ有ス。
- 一、倶楽部ノ活動ハ、委員ニ於テ取扱フモノトス。

そして道場建設に対する進言や、建築資金調達のため名士を訪問し、整備拡充に尽力したのが柏原文太郎であった。

兎に角かうした運動団体が出来たので、私は画工当局に不取敢剣道柔道の道場を造つて貰ひ度いと提言したが、学校ではさなきだに乱暴書生に、此上道場等を建て、武術を仕込まれた日にはとてもかなはないといふ私の言を取上げて呉れない。然し今の学生の風習を矯正するには運動に限るといふ事を極力説いて、終いには学校で金を出して呉れないでもいいから学校内に道場だけを建てさせて貰ふといふ許しを得た。此処に於て私は犬養毅、牟田口元学、中野武宮その他四名だつたか、七名だつたか明瞭り覚えてみないが、諸名士から寄付金を得て震災で崩れた旧大講堂のあつた所に道場が出来て、犬養さんが七徳堂と名つけて呉れた。此道場は七百円許りで出来たのだが、何んでも寄付金を集めた時二百円程不足だつたので、再度犬養さんの所に頼みに行つてその不足を補つて貰つた⁽¹³⁾。

この時にたくさんの人々が道場建設に賛成し進んで寄付した。道場の設立年表は次のようになっている。

明治 29 年 7 月 9 日 早稲田倶楽部送別会の席上、評議員犬養毅の勧告により道場建設資金募集の件決定

明治 29 年 12 月 2 日 道場落成式挙行。

明治 30 年 2 月 3 日 体育部規定制定、3 月 1 日より実施。

また東京専門学校体育規則⁽¹⁴⁾は、以下のように定められた。

第一条 本校学生に完全なる身体の發育を得せしむるを目的とし、体育部を置く。

第二条 体育の方法は凡て左の如し。

- 一 郊外運動
- 一 器械体操
- 一 撃剣
- 一 柔術
- 一 テニス
- 一 ベース・ボール

第三条 郊外運動は、毎年春期一回之を行ひ、諸般競争遊嬉を為さしめ、優等者には

賞を与ふ。撃剣、柔術は、一定の日時に教師に就き練習せしむ。其他は各部の委員の見込に依り適宜之を行ふ。

第四条 本部に部長一名、委員長一名及び委員若干を置き、一切の事務を処理せしむ。部長は本校教職員中より推薦し、事務を総轄し、金銭の出納を監督せしむ。委員長は、部長之を定め、委員を総轄せしむ。委員は、各学科学生中より三名を選挙せしめ、各種の運動遊嬉を分掌せしむ。

第五条 部長及委員長の任期は一ケ年、委員は半ケ月とし、俱に再選することを得。

第六条 本部に委員会を置き、部長、委員長、及委員を以て之を組織す、委員会は、適宜之を置き、本部に関する一切の事項を評決し、本校の同意を得て之を施行す。

第七条 本校学生は総て体育費として毎月金五銭を収むるべし。体育費の納付及怠納処分は、月謝と同一なるべし。

第八条 毎年春秋二回、部長収支の報告なすべし。

さらに付則⁽¹⁵⁾としては次のことが定められた。

一 本規則は3月1日より実施す。

1897(明治30)年2月25日 部長には市島謙吉、委員長には柏原文太郎其任に当り、学生中より秋山正一(邦正三)、長田瑛(英政二)、荻田喜一郎(行政三)、田端春造(文三)、鈴鹿直弥(訳読)、小山田淑助(英法三)、大関誠一郎(行政一)、広田季吉(法律一)、菅井武雄(文一)を委員に選定。

1897(明治30)年3月 体育教師として、矢部寛恒(抜刀)、横山作次郎(柔術)、内藤高治(撃剣)を嘱任。

1897年3月15日 道場「七徳館」開館。

1897年4月5日 道場規則を制定。

道場規則⁽¹⁶⁾は次のように定められた。

第一条 武道の要は練心養気を専一と為すものなれば礼儀を正し修業すべし。

第二条 入場の際は必ず着袴すべし。

第三条 道場内在りては静肅を旨とし、稽古の妨害となる挙動あるべからず。

第四条 稽古上方式其他凡て教師の命を守り専心に修業すべし。

第五条 稽古の終始は必ず礼を為すべし。

第六条 道具は凡て稽古前に能く破損の点を調べ使用すべし。

第七条 道具は凡て丁寧を用ゐ、使用後は取纏め元の如く始末すべし。但し、道具を破損したるときは場合に依りて弁償せしむることあるべし。

第八条 稽古中は稽古服を着用すべし。但し稽古着の下の「シャツ」又は袴の下「ズ

ボン」及足袋を使用すべからず。

第九条 食事後一時間を経過せざれば稽古すべからず。

第十条 酒気を帯びて稽古すべからず。

第十一条 稽古其他に付質問等ある者は凡て委員に申出ずべし。

道場の規模は、木造平屋建四間に七間の結構を有し、折半して撃剣、柔道の練習に当てられた。道場を「七徳館」と名付けられたのは、犬養毅である。

早稲田倶楽部の主旨の 1 つとして、部員の親善を図るため遠足を行うことが盛られているが、これが実行された最初のもは、1898(明治 31)年 11 月 12 日、鎌倉へ一泊旅行を試みている。遠足たる目的であったから、鉄路の便を借りず、軽衣草鞋に身を固め、午前 4 時校門前を出発、一行 50 人、健脚を利し九段、京橋を経て壺岸島に向う。ここから船便によって浦賀に渡り、北上して横須賀を過ぎ、午後 6 時鎌倉八幡宮前の対鶴楼に旅装を解く。翌日直ちに江の島に行くはずであったが、天皇陛下が西下されると聞き、急遽予定を変更して鉄路大船に向かい、奉送せんとした。しかし時既に遅かった。そこで江の島で遊び主日風光釣りを楽しみ、午後 5 時に藤沢駅を出発して品川経由新宿駅に下車して帰校したと記録されている⁽¹⁷⁾。

これらは「早稲田倶楽部」創立後、1～2 年間における活動状況を、その設立趣旨に従って述べたものであるが、この倶楽部がその後において、分化し、組織化し、体系化された体育関係各部の成立を促したところのいわば母体となったことが明らかである。しかしこれらは学生各自の趣味や希望によって成り立ったもので、これに対して全校挙げて参加したものに運動会がある。全講師、全学生が、青天の下に相集まり、技を競い、余興に趣向を凝らし、終日和気藹々と、互いに歓をともにした有様だった。運動会は、開校後 2 年目の春、飛鳥山に出かけて行ったものが第 1 回であるというから、非常に古い歴史を持っているところになる。

上記でも触れたように実際行われた運動会はたわいのないもので、旗取、綱引き、相撲、盲競走など、今日の幼稚園や小学校でやる種目を、大の男がワイワイ騒いで行ったものであった勝者には、出入りの書店や出版部から寄贈された賞品が与えられ、2～3 回も一等を取った者は、重い書籍を何冊も抱えて帰るのに困ったという。1901(明治 34)年 3 月高等予科の授業が開始され、間もなく「私立学校令」(明治 32 年)による認可学校になると、そろそろ中学出のスポーツマンが入ってくるようになり、運動会改善の声が高まってきた。そこでこのため学生たちの間に委員会が設けられ、穴八幡前の校地(現在の文学部所在地)で、競技本位の運動会を開くことを提唱し、そうなれば来観者もあって学校の宣伝にもなるとして高田学長に交渉したところ、学校は運動会によって広告して貰わなくてよいと逆鱗に触れて引き下がる一幕もあった。しかし安部磯雄は学生の要望に応じて熱心に支持し、当局にたゆみなく交渉を続けたため、遂に 1902(明治 35)年の春、これが実現し、運動会の体質を変え、その品位を向上せしめるに十分貢献した⁽¹⁸⁾。

年 1 回の飛鳥山・墨田などで举行された運動会では、日ごろ練磨した体力を競走という形で競い合ったのはいうまではないが、さらに仮想行列や演劇を披露し、また酒食を共

にして歓喜した。1895(明治 28)年 4 月 20 日、寄宿生を中心とする早稲田倶楽部の創設により、体育を盛にして徳義の実践励行を重視するという主旨に則り、撃剣・相撲・庭球・野球の専門的な分化が始まり、各自がその好むところに従って運動を試みるようになった。こうした傾向は、1897(明治 30)年 3 月 15 日の道場(七徳館)建設を契機として、学苑の全体の活動にまで発展し、同年 2 月体育部規則の制定となり、運動の内容も拡大され、前掲四部門以外に、郊外運動(陸上競技)・器械体操・柔術・弓術が加えられた。しかしその総合的な発表機関としては、なお且つ運動会が利用されていた。

第 25 回春季運動会は同年 4 月 13 日午前 8 時から穴八幡神社前の広場で挙行された。この日は天気晴朗で、空には一点の雲もなく、運動場入口には大緑門を作って国旗を装飾して盛観を添え、町内の各戸も一斉に国旗提燈などを掲げて祝意を表した。学生達は早朝から会場に集まり、一般の観客も柵外に集まりその数は数千人に及んだという。戸山学校(日本陸軍の軍学校の一つ)の音楽隊の招いてこの行事を盛んにしたのもこれが初めてのことだったが、報知新聞社から寄贈された優勝旗が、選手諸君の士気を鼓舞したのもこれが初めてのことだった。これまで学苑付近に適当な広場がなかったため、自然と遠足、親睦を兼ねた運動会であったのだが、この時を以て漸く隣接する穴八幡前の広場を得て挙行できるようになった。まだ専属の運動場ではなかった。この陸上運動会は、規則上はともかく、以後毎年 4 月に開催されて学生の最も興味ある行事の 1 つとなっていくた。早稲田倶楽部が発展的解消を遂げて体育部の設置を見るに及んでも、後に体育部長となった安部磯雄が、

其の当時に於ける学校の運動部なるものは、柔道、剣道、弓道の 3 つであって柔剣道の道場の如きはトタン葺の小建築に過ぎなかった⁽¹⁹⁾。

と回想していることから分かるが、構内の広場はその需要を満たすには余りにも狭すぎた。従って各部の練習や運動会を催すためには是非共用の運動場を設ける必要があった。1902(明治 35)年 7 月 12 日、早稲田大学開校に際して大隈邸で開かれた評議会の中で、体育部費の値上げが議せられたのを機会に、運動場の設置が議決された。それに従って、学苑西北の台地におよそ 5000 余の地を設け、3000 余坪を野球場(後の安部球場)、2000 余坪をテニス場等に充てた⁽²⁰⁾。これと共に早稲田大学体育部規則⁽²¹⁾が次のように改正された。

第一条 本部の目的は学生に健全なる身体と活躍なる精神を養はしめ併せて修徳の実行を為さしむるに在り。

第二条 当分本部を分ちて柔術、撃剣、弓術、野球、庭球、短艇の六部となす。

第三条 学生は随意に其好む所の部を選択することを得。又二つ以上の部を併せ選ぶも妨なし。

第四条 体育部員たらんとするものは其姓名及び其属すべき部名を記して各部の委員或は本校の事務所に申出づべし。

- 第五条 選手を選定に関する規則及び其他詳細の規則は各部自ら之を定めるものとする。
- 第六条 各部の連合会を開く場合には一部毎に二人の代表者を出すべきものとする。
- 第七条 本部は春季に水上運動会、秋期に陸上運動会を開く。
- 第八条 春秋二期に於ける大運動会にては政治経済、法律、文学の文化競争を行ふものとする。
- 第九条 本部の経常費として本校学生は何人たるに拘はらず会費として毎年金壹円貳拾銭を納むべし。但し、其納期は九月より六月迄毎月金拾銭宛七月金壹円貳拾銭学費と同時に本校会計課に分納すべし。
- 第十条 各部にして臨時の費用を要する時は本部の経費中より支出すべしと雖も平時の出費は各部員更に醸金して之を弁ずべきものとする。

これによると既設の五部の他に新たに加えられて水上運動会が行なわれるようになった。また、学生は必ずしもいずれかの部に所属しなければならないわけではなかった。しかし、出来るだけ全学生がこれに参加することを要求されていた。この早稲田大学開校に伴う議決や改正などにより、体育部が本格的に活動を開始した 1910(明治 43)年には、一層の発展を期して体育部の制度の改正が行われた。その主な点は、各部に部長を置き、学長がこれを統督して、その整頓及び発達を図ることであった。なお、遊泳部が当局より承認されて、承認部数は七部となった。このように大学開校以来運動に力を入れた結果、運動の盛んな学校と言われるようになった。また従来借地であった本学苑の運動場は、1911(明治 44)年 12 月その大部分が購入された⁽²²⁾。

1902(明治 35)年以来体育各部は「早稲田大学体育部」の下に鳩合されていたが、各部の発展・増加と、大学の支出する体育部費だけでは不足するため、1921(大正 10)年 4 月に新しく「早稲田大学体育会」が組織されて、「早稲田大学体育会規則」が制定された。この規則に基づき、大学は年額 1 万円ずつを資金に積み置き、また学生より体育部費として毎年 3 円ずつ徴収することになった⁽²³⁾。

第三節 部の成り立ちと対外試合

(1) 柔道部

1897(明治 30)年 2 月、柔道は東京専門学校（現慶応義塾大学）の課外訓練として志望者に課せられ、剣道とともに盛んになっていった。1902(明治 35)年 5 月 4 日京都平安神宮で挙行された第 7 回大日本武徳会⁽²⁴⁾に、柔道・剣道合わせて 3 名の選手を派遣したが、このときの柔道部選手は山田敏行、天谷八郎の 2 名であった。またこの年の 11 月 30 日、柔道大会を学校の講堂で開いている。撃剣部と同様に、設立当初より寒稽古は行われていたようであるが、1907(明治 40)年を例として挙げると、早稲田実業学校の生徒を交えて出席者は 150 名に達し、皆勤者も 90 名に及んでいる。この期の部員数は 400 名あまりでそのうち有段者は 30 名であった⁽²⁵⁾。

(2) 剣道部

1895(明治 28)年創立の早稲田倶楽部の遊戯種目中には撃剣の一項が含まれていて、これまで寄宿舎生を中心として有志がそれぞれ独自に行ってきたものが、この時点で一応組織として認められたことになり、それが 1897(明治 30)年 2 月、東京専門学校学科外訓練として体育部の規則が設けられると、柔術・弓術とともにその中に包含されて、身体の鍛錬に重要な役割を占める種目となった。

柔道部の項に 1902(明治 35)年大日本武徳会への体育部派遣について記したが、このときの撃剣部選手は藪重郎で、勝利を収めた。また 12 月 13 日には本年の納会として道場で紅白試合と五本抜・三本抜試合が行われた。当初、撃剣部と言われたこの部は、1905(明治 38)年頃から剣道部と改称された。当時部員の数は 350 名あまりであった。武道の鍛錬には寒稽古が不可欠であるが、その寒稽古については 1905(明治 38)年を例に挙げると、1 月 18 日から 2 月 6 日まで毎朝午前 5 時より 7 時までこれを行い、参会者 1 日 48 名、うち 27 名が皆勤賞を授与させられたという。この記録には若干の現況報告があり、それによると当時の部員は 400 名であるが、続々入部するもの多く、これらのため竹刀数十本を備えつけて稽古の弁を計り、また毎日午前 8 時から午前 4 時に至る稽古時間中は、師範が出席して教授に当たり、会費は一切不要であったという⁽²⁶⁾。

(3) 弓術部

弓術部の歴史は 1899(明治 32)年に遡ると言われ、すでに体育部が創立されたときに、その中の一部として列挙されていた。1904(明治 37)年 4 月には運動会の一隅、目白台が見える丘に射的場が新設され、21 日には「創立以来の盛会」と記録されている大会が開催された。この日は来賓・学生 200 名あまりの参加を得て、午前 9 時に試射が始められて、普通部員⁽²⁷⁾ 12 射、来賓および名誉部員 12 射があり、それにより紅白試合を行い、2 点差で白軍の勝利に終わった。この部も、寒稽古を行っている。そして、部員は 1912(明治 45)年時点で 200 名あまりであった⁽²⁸⁾。

(4) 野球部

野球は日本におけるスポーツの華であり、かつ一時期の早稲田大学の興隆に貢献したところが少なくない。大学の歴史と運命とがこれに関わっていたというものさえいるほどである。また野球の今日の盛況を招いたのは、早稲田大学の貢献最も多きにあると言っても過言ではない。日清戦争頃の校内文献に、時々「ベース・ボール」の文字が見えるが、携わった者のメンバーも、試合の様子もほとんど残っていないので、どのくらいの程度に行われたのか想像がつかない。当時の皮革の白球が珍しく、その投受(今のキャッチボール)をしただけでもベース・ボールをしたと称した例があるので、その程度のものではなかったと思われる⁽²⁹⁾。

明治 30 年代に入ると、東京専門学校体育部規則の中には野球が包含されていて、押川方存の主唱の下にできた野球部は一応態を備えていた。しかしいまだ幼稚で、対戦する相手は大抵早稲田中学でありながら、整備した練習に鍛えられてくる彼らにいつもひねられたことが、押川の回想の中から考えられる。前述のように早稲田キャンパスの景観は一変

し、往日の弊衣破袴の書生型が減少し、金ボタンの中学出身者に圧倒される観を呈するに至った。これを喜んだのは安部体育部長で、中学生は野球の経験者が多いから、その中から選抜して整備したチームを作る希望を抱き、ここに正式の部として発足した。

当時の市内中等野球界では、郁文館中学と青山学院が二強豪で、郁文館は大橋武太郎・押川清のバッテリー、青山学院は橋戸信投手に新たに入学した神戸一中の名捕手泉谷祐勝に加えたバッテリーで、共に二度一高を破って、球界注目の焦点であった。この四強が前後して早稲田に入ってきたのは、野球部の全く聞こえておらぬ早稲田だから、それが目当てでなくやはり高等予科というのが魅力だったのに違いない⁽³⁰⁾。そもそも早稲田の野球史は、同年 34 年正式に次の 8 人から発足する。すなわち、麻布中学から入ってきた丸山二郎が投手で、大橋が捕手でキャプテン、1 塁は青山学院出の西尾牧太郎という混血児、遊撃は水戸中学出の鈴木豊、残るポジションは同じく水戸中学出の鈴木浩之、明治学院出の河端広益、同じく清水春雄、森岡中学出の弓館芳夫が代わりあって務めた。これでは一人足りないが、それは臨時に仲間に加わって来るもので補った。予科第一回生が夏休みを終わって再び集まると、11 月 3 日彼らは正式にチームの結成を行った⁽³¹⁾。

(5) 庭球部

庭球部の歴史も相当に古い。すでに寄宿生を中心として結成された早稲田倶楽部では、撃剣・相撲・野球とともに庭球(軟式)が実施されていたが、1903(明治 36)年 10 月になると、2 面のコートを与えられて、安部磯雄の指導の下に本格的な部として発足し、まず、高等師範学校コートにおいて高師と手合わせを行い、敗退を見ている⁽³²⁾。

(6) 短艇部

体育部の 1 つとして発足した短艇部は、それ以前に同好会的なものとして存在していたようである。1902(明治 35)年秋に体育部が改正されて、短艇部として公認されると同時に、時雨・青葉・常盤の三隻が新造された。『早稲田学報』第 100 号に掲げられた端艇部に関する記事には、1904(明治 37)年 3 月 20 日隅田川上流で端艇部艇庫開祝賀競漕会が開かれたと記されている。この『早稲田学報』の記事以降、短艇部は端艇部と改められた。

当時の部員は 600 名あまり、選手は 50 名と伝えられている。なお、旧艇部選手を中心とする各運動部の校友有志などからなる親睦団体であり、且つ端艇部の後援・相談役である稲門艇友会が 1911(明治 44)年に設立され、春秋 2 回の会合が行われている⁽³³⁾。

(7) 相撲部

1917(明治 20)年に創業し間もなく、講師・学生の親睦のため、飛鳥山などに遠出し、親睦会(運動会)を開いたときにでも、陸上競技とともに、これとはやや異種であった相撲競技が余興として必ず催された。そして 1895(明治 28)年に早稲田倶楽部が結成された際には、撃剣や野球とともにますます盛んに行われた。1902(明治 35)年の改正体育部規則では学校当局より公認されなかったが、当時、相撲全盛の影響を受け、学生の相撲熱も、中々盛んであったためか、翌日には学校より承認され、5 月 30 日に土俵開きが行われた。

当日、常陸山の弟子の序二段の藤見野ら十数名を招き、学生もこれに加わって、東西対抗試合が開催された。以後、記録は残っていないが、泉谷は、1907(明治 40)年に学生相撲の皮切りとして国技館にてオール早慶戦が開催されたことを回想している⁽³⁴⁾。

(8) 遊泳部

記録に見えるところでは、体育部の一部として遊泳部が新設されたのは、1905(明治 38)年 7 月 5 日のことで、神奈川県逗子海岸で遠泳・競泳を行ってことに始まる。この部は、最初は遊泳部と称したが、1906(明治 39)年の水泳部記事となっているので、遊泳部という名称は定着しなかったとも思われる。したがって、学校当局も 1907(明治 40)年頃までそれを併用していて、それ以後水泳部と呼称している。明治末期の部員数は数百名あまりであった⁽³⁵⁾。

(9) 競走部

陸上競技の淵源は明治時代の運動会に求められる。この運動会には 2 種類あると思われる。1 つは遊戯的な運動会であり、1 つは東京大学がストレンジの指導の下に行ったような体育的な運動会である。この二様式が種々の形をとりながら全国の学校に広まって、やがてその学校の最大の催物のみならずその地区の楽しい年中行事の 1 つに数えられるようになった。早稲田の運動会は師弟相交じって競技を行うといった遊戯的なものであった。その種目は、ヤード競争と言われた徒歩競争、高跳び、幅跳び、二人三脚、相撲などがあり、互いに技を競い、1 日を清遊した。さらに、各学校の運動会が相互に他校の学生を招待し始めるに及んで、運動会是一種の対校試合の趣を呈するに至った。もちろん、学苑からも血の気の多い学生がこぞってこれに参加した。例えば、野球部の項で紹介した泉谷がそうである。

陸上競技部の前身である競走部は、当時、部としての存在はなかったが、各大学・高等学校で催される、恒例の運動会には代表選手として招待競技に出場していた⁽³⁶⁾。

まとめと考察

スポーツの始まりについて、創設者である大隈重信や外国からの影響があるような記事は残されていない。寄宿舎生を中心とする早稲田倶楽部が、撃剣・相撲・庭球・野球の専門的な分化をし、組織化し、体系化された体育関係各部の成立を促したところのいわば母体となったことが明らかとなっているので、当時の寄宿舎生の活躍がよく分かる。寄宿舎生が立ち上げたものではあるが、講師や学生の間を深めるような運動会も行われており、人と人の関わりにも注目すべきである。体育に興味を持ち始めた生徒も増え土地の練習場を大きくすることで、早稲田大学体育部規則も改正されたが、これをきっかけに体育が盛んになったと思われる。

早稲田倶楽部規約、東京専門学校体育規則、早稲田大学体育部規則と定められている規則を比べてみると、費用や場所が確保できないという面で苦勞していたことも徐々に解消されている事が分かる。様々な場所に運動場や練習場を確保することが困難であった当時

も、参加する生徒から費用を徴収するというアイデアやそのお金で場所を確保し、運動面での成績、もしくは、ここでは挙げてこなかったが学業面での成績を残し、「早稲田」という名前を有名にすることで、多くの人々に協力を得られたのかもしれない。

〔註〕

- (1) 早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』第一巻、早稲田大学出版部、1974年、3頁。
- (2) 佐藤能丸『近代日本と早稲田大学』早稲田大学出版部、1991年、6頁。
- (3) 早稲田大学大学史編集所『稿本 早稲田大学百年史』第二巻上、早稲田大学出版部、1977年、272頁。
- (4) 『早稲田大学開校東京専門学校創立二十年記念録』早稲田学会、1903年、312-313頁。
- (5) 前掲『稿本 早稲田大学百年史』第一巻下、1974年、368頁。
- (6) 同『稿本 早稲田大学百年史』第二巻上、401頁。
第一高等予科は大学部政治経済学科に、第二高等予科は同部法学科に、第三高等予科は同部文学科に、第四高等予科は同部商科に、第五高等予科は同部師範科に入る者を予備科とする。
これらを合わせて、高等予科と呼ぶ。
- (7) 同上、486頁。
- (8) 同上、496頁。および『早稲田学報』1928年5月発行、第399号、31頁。
- (9) 前掲『稿本 早稲田大学百年史』第一巻下、375頁。
- (10) 同上。
- (11) 同上。
- (12) 同上、376頁。
- (13) 同上、377頁。
- (14) 同上、378頁。
- (15) 同上、379頁。
- (16) 同上。
- (17) 同上、380頁。
- (18) 同上、375-382頁。
- (19) 安部磯雄『青年と理想』岡倉書房、1936年、215頁。
- (20) 前掲『稿本 早稲田大学百年史』第二巻上、590-592頁。
- (21) 同上、593頁。および『早稲田学報』1960年9月発行、第74号「早稲田記事」467-468頁。
- (22) 同『稿本 早稲田大学百年史』第二巻上、593頁。
- (23) 同『稿本 早稲田大学百年史』第三巻上、1980年、642頁。
- (24) <http://www.butokukai-honbu.org/mokuteki/index.html>

日本が世界に誇る無形文化の一つである古来伝承の伝統的な古武徳等を術科、流派を問わず集大成し、単にこれらの技能的、形態的側面のみならず精神的面を重要視、これらを体系的に保存、伝承するための研究、調査、出版及び伝承者の育成を通じた普及発展を図り、もって日本文化の伝承に寄附することを目的とし、さらにそれらの普及事業を通じて武道の生涯教育を広く促し、青少年の総合的健全な育成を図り、国際的な古武道発展に大きく寄与すると共に世界平和と国際親善に貢献することを目的としている。

- (25) 前掲『稿本 早稲田大学百年史』第二巻上、596-598頁。

(26) 同上、598-599 頁。

(10) 同上、272 頁。

当時の早稲田大学は大学部、専門部、師範科（旧高等師範部）、高等予科、清国留学生部で成り立っており、関係校として早稲田中学校、早稲田実業学校及び早稲田高等予備校がある。

高等予備校は早稲田中学校に併置され、高等学校または各種の高等専門学校に入学しようとする中学卒業生のために準備教育を施す学校で、1903（明治 36）年に設立されている。

(28) 同上、600-602 頁。

(29) 同上、602 頁。

(30) 同上、603 頁。

(31) 同上、602-609 頁。

(32) 同上、618-620 頁。

(33) 同上、621-625 頁。

(34) 同上、625-626 頁。

(35) 同上、626-627 頁。

(36) 同上、628-629 頁。

第四章 東京高等師範学校における部活動

はじめに

東京高等師範学校における部活動の発展について述べるにあたり、まずは東京高等師範学校の沿革をまとめておきたい。

1872（明治 5）年 5 月 28 日に文部省より小学教師教導場建立の議が出され、7 月 4 日に「師範学校」という名称で設立された。6 月には募集に着手して志願者は三百余名にのぼり、9 月には入学試験が実施された。54 名が入学を許可され、翌年 5 月に寄宿舎が設置され全生徒が入舎した。同年 8 月、東京以外の 6 大学区にも官立師範学校が設立されるにあたり、東京の「師範学校」は「東京師範学校」に改称した。1885（明治 18）年 12 月には体操伝習所を所属にしたが、翌年の「師範学校令」に伴い 1887（明治 20）年には附属体操伝習所は廃止となる。同時に中等学校の教員のみ養成する機関として改組され、名称も「東京師範学校」から「高等師範学校」に改称した。1893（明治 26）年 9 月、嘉納治五郎が校長に就任。校地の狭隘のため 1900（明治 33）年より旧昌平黌の地から小石川区大塚窪町に移転の計画が進み、1903（明治 36）年まで漸次校舎を移転していった。

1902（明治 35）年、広島に高等師範学校ができたため「東京高等師範学校」に改称。1918（大正 7）年の「大学令」に基づいて次々と大学が誕生する中、東京高等師範学校でも 1919（大正 8）年頃より大学昇格運動が起こり始める。1929（昭和 4）年に東京高等師範学校の専攻科を改組してようやく東京文理科大学が創設されるに至る。戦後の学制改革により 1949（昭和 24）年 5 月、新制東京教育大学が発足すると、東京高等師範学校および東京農業教育専門学校、東京体育専門学校とともに同大学に包括されて、東京高等師範学校は 1952（昭和 27）年 3 月に、東京文理科大学は 1953（昭和 28）年 3 月に最後の卒業生を送り出し、それぞれ閉学式を行う。その後東京教育大学は 1973（昭和 48）年 10 月に発足した筑波大学へと移管。1978（昭和 53）年 3 月に閉学し、校地・附属施設が完全に筑波大学に移転される。

この章では 1872（明治 5）年の師範学校設立から昭和の初めごろまでを焦点に、東京高等師範学校における運動スポーツの始まりから部活動や校友会の発足、対外試合などを通じた部活動や各種スポーツの発展の様子を明らかにしたい。

第一節 運動会設立前の課外活動

東京高等師範学校におけるスポーツの始まりは、坪井玄道の指導によるものが多かったとされる。体操伝習所で教師を務めていた坪井玄道⁽¹⁾はやがて東京高等師範学校の教員となり、「洋書の翻訳に基づいてまずボート・テニス・ベースボール等を採用し」⁽²⁾スポーツの指導を行った。

(1) テニス

テニスの始まりは 1878（明治 11）年頃、アメリカ人 G.A.リーランドが初めて日本にも

たらしたと言われている。諸学校での体操教科指導方法を教えるためにアメリカから来日したリーランドは、1879（明治12）年3月、体操伝習所で教員の坪井玄道が通訳しながら各地から集まった伝習員に体操を中心とした保健や体育の教科を教えていた。時には近隣の東京高等師範学校、東京大学予備門などに出かけて指導することもあった。それにより東京高等師範学校にもテニスが伝わり、明治16、7年頃には坪井の指導によりラケットを揃え、コートが設けられていたという。

1888（明治21）年10月に全寮制だった東京高等師範学校の寄宿舎の舎監になった坪井は、寄宿生たちの健康維持のためにローンテニスを推奨した。東京高等師範学校の庭球場はこの年に発足したといわれている。ただ、当時の用具は輸入に頼り、すこぶる高価だった。このため、最初は輸入物ながら玩具用ゴムマリを使っていたが、東京高等師範学校は同年に設立された「三田土ゴム」に国産ゴムマリの開発を依頼した。これにより、以後の日本ではゴムマリを使った「軟式（現在のソフトテニス）」が盛んになった。

（2）ボート

東京高等師範学校のボートは、まず茗溪（神田川）に2艘の端艇を繋ぎおき土曜日曜などにはこれを師範学校の生徒などに貸し出し、隅田川に出て行舟術をなさせたことが始まりとされている。『創立六十年』にはこの「二艘こそは我が国ボートの始と称せられ、茗溪・昌平と（いう名前）今に語り伝えられている」⁽³⁾と書かれている。1878（明治11）年11月16日に外国人で構成された東京漕艇倶楽部が、大橋と永代橋間で秋季競漕会を行うと、それに刺激を受けたように1880（明治13）年体操伝習所が就業の余暇に操櫓法を練習し、1882（明治15）年3月14日には石川島造船所に茗溪・昌平の2艇の建造を依頼した⁽⁴⁾。体操伝習所は1885（明治18）年12月には東京高等師範学校の所属なったため、そのときにこの2艘のボートも東京高等師範学校にもたらされたものと推測できる。当時隅田川において漕艇は未だ盛んに行われておらず帝国大学でも外国の捕鯨船の古ボートを購入して使用していたというありさまであったから、この新型の2艘は諸学校に大きな刺激を与え、相次いで新艇の建造をみるに至った。

1883（明治16）年6月に発行された『茗溪会雑誌』には「體育の必需」という題で「（行舟術は）筋力を強壯にする、勿論意気を爽快にすること多ければ夙夜に勤学する者には甚だ有益なるべし」⁽⁵⁾とあり、勉学に励む学生たちに漕艇で体を動かすことを奨励していることがわかる。

その他の競技に関しては、「ベースボール、弓術、撃剣も器具を備えて有志で行われた」⁽⁶⁾との記述があるだけで詳細な様子を確認することはできなかった。

（3）寄宿舎におけるスポーツ

東京高等師範学校は全寮制である。その理由は『嘉納治五郎：世界体育史上に輝く』に窺える。

生活を通して、ちがった気風のものに接することが出来、卒業後どの学科の人とも連

絡があり、その人を通じて他の級の人とも連絡し得ることになる。これが修養上からも、学校全体の親しみのためにも最もよいと考えたのである⁽⁷⁾。

また、「生徒は教育を受けるために入ったのだから、完全な自治は許されない。他日、自治し得るための力を養うよう訓練すべきだ」⁽⁸⁾との考えのもと、1886（明治 19）年より舎監が置かれ、寄宿している学生・生徒の生活指導や監督にあたった。中でも坪井玄道は 1890（明治 23）年から 1909（明治 42）年までの長きにわたって舎監に在職しており、彼の指導によって寄宿舎でも運動遊戯が行われるようになっていったと考えられる。

このころ在学していた川村理助の談話によると、「当時学生の遊戯としては殆ど何もなく、坪井玄道氏の指導でベースボール・テニス・ボート等の新しい運動が起こりかけたが、まだ幼稚であった。一般には夕食後機械体操をよくやった」⁽⁹⁾とある。一方で「室内遊戯ではトランプが唯一であったがこれも舎内ではやれぬ…寄宿舎には私有物を一切置くことができなかった」⁽¹⁰⁾とあり、かなり厳重な規律の下に統制されていた様子がかげえる。トランプなどの遊びは許されていなかったが、スポーツなどの遊戯は健康維持も兼ねてよく行われていたと考えられる。

第二節 運動会の設立から校友会設立の頃の部活動

(1) 嘉納治五郎と運動会、校友会の設立へ

これまで述べてきたように東京高等師範学校では 1883（明治 16）年ごろには既にボートやテニス、ベースボールなどが行われるようになっていたが、それらのスポーツが正式な組織として整えられたと最初に確認できるのは、1896（明治 29）年の運動会の設立である。

運動会設立以前にも課外活動として寄宿舎における寄合会と、師弟間の親睦を図る忘年会が発展した校友会が行われていた。寄合会は 1880（明治 13）年に始まり、毎月第 1、3 土曜日に演説討論や学術講話などを行っていたものである。これには職員は関与していなかった。校友会は明治 24.5 年頃、毎年 12 月に職員と生徒が飯田河岸富士見樓や上野公園に集まって忘年会を開いていたものが、1893（明治 26）年になって校友会という名がつけられて始まった。当時の『茗溪会雑誌』には 1 月 22 日に富士見樓で第 1 回会合が開かれた旨が記されており、職員 35 名、生徒 80 名が午後 1 時より 3 時まで各々随意の遊戯をなし、3 時に設けの席につき挨拶や演説を行ったといった内容が残されている⁽¹¹⁾。

その頃、坪井が取り込んだ西洋の運動遊戯は、1893（明治 26）年に校長に就任した嘉納治五郎によってさらに奨励されていた。『嘉納治五郎 世界体育史上に輝く』には、このような記述がある。「嘉納は生徒に自信の念を抱かせることに力を用いた。古いころ、高等師範の生徒は附属の子どもからヨボと呼ばれていた。よぼよぼしているからだ」⁽¹²⁾。これを受けて嘉納は「形に現れた肉体上で優越を感じること、生徒を指導するに体育と結び付けて薫陶すること等の必要性を説き、教育者の職能を十分に成功せしむる爲、凡ての運動を奨励した」⁽¹³⁾。柔剣道では第一流の教師を招いたり、日本は海に囲まれているから海を恐れぬ国民を養成すべきと水泳を奨励したりした。その結果、「生徒の中にも優秀

なる運動家が輩出することとなり、やがて之が自ら任ずる精神をも養い成す助にもなった」⁽¹⁴⁾。

長く教育に携わった経験をもとに青年に対して修養を説こうと 1910（明治 43）年に記した『青年修養訓』において、嘉納は、「運動遊戯を単に身体の為ばかりでなく、自己に対し他人に対しての道德品位上の修養の資に供し、このような運動の習慣を修学時代を終えると同時に停止しないで永くこれを継続し心身ともに若々というように望む」⁽¹⁵⁾と、運動遊戯の価値について述べている。

このような思想の下に嘉納は運動遊戯を奨励し、1896（明治 29）年には運動会の設立を果たす。また、大運動会の開催にも力を入れた。スポーツを積極的に教育システムに導入して学生生活に取り入れていったのである。

実際に『東京高等師範学校沿革略志』には「森有礼の監督たりし頃より、本校生徒は特に体操を重んじたれども、その他の運動につきては概して冷淡なりしが、嘉納治五郎校長となるに及びて、大に柔道を奨励し、これを学ぶもの次第に多く、その他各種の運動も亦漸く盛に行はるるに至り」⁽¹⁶⁾と記されており、嘉納治五郎の運動遊戯奨励の成果が表れていたことがわかる。

運動会の組織についての詳しい内容は後に述べるが、校長を会長とし、その他にも職員や生徒から役員を定めており、きちんと組織立ったものであったことがわかる。そして 1901（明治 34）年 9 月に、これら 3 つの組織（寄合会、校友会、運動会）が統一されて「校友会」が組織された。この年は嘉納の 3 度目の校長就任の年であり、これがきっかけとなって校友会が設立したとも言える。また、このころは日清戦争後の国力充実期であったため社会の期待に応えるため、真摯なる研学の気風を作り、生徒の団結を高めるために校友会の統一を図るに至ったと『創立六十年』に記されている⁽¹⁷⁾。校友会の会長は嘉納校長で、談話部会と運動部会に分かれており、舎監がそれぞれの部会長におかれている。それまでの寄合会・校友会並びに運動会が合わさったものであるため、規模は非常に大きくなった。

(2) 運動会

1896（明治 29）年 3 月の運動会設立当初、運動会に参加した部は柔道部・撃剣銃槍部・弓技部・器械体操及び相撲部・ローンテニス部・フットボール部・ベースボール部の 7 つがあった。10 月には自転車部も設けられ 8 つになった。

生徒を正会員、職員を特別会員とし、生徒から毎月 5 銭、職員は月俸の 150 分の 1 を会費として集めていた。ひとつまたは数部に入って毎日 30 分以上必ず所属の部にて運動をすることが運動会規則によって定められていた⁽¹⁸⁾。その他毎月 1 回遠足を試み、水泳、漕橈等は臨時に行われた。

各スポーツの当時の様子だが、まず柔道については校長（嘉納治五郎）自ら理論と型の教授を為した。1896（明治 29）年には級を定めて五階とし、秋から紅白試合を始めた。毎年の寒稽古にも 30 名余りが参加していた。撃剣は日清戦争後に尚武の熱が高まるとともに盛んになった。寒稽古を実施するも永楽町（麴町の旧地名）の寄宿舎では道場がなかつ

たため戸外で行ったという。

当時一番盛んであったのがテニスであり、校技と呼ばれるほどであった。全生徒のほとんどがラケットを手にし、運動会経費の3分の1がテニスに割り当てられていた。1898（明治31）年11月には高等商業学校との対校試合が行われた。

遠足は毎年春に蒲田の梅堀切の菖蒲を観賞、秋にも国府台に行って職員生徒の懇親を重ねていた。1898（明治31）年2月御茶ノ水から池上本門寺まで各級健脚競争を行い、160名余りが参加した⁽¹⁹⁾。

(3) 校友会

上述のように1901（明治34）年9月、寄合会、校友会、運動会の3つの組織が統一されて校友会が設立された。談話部会と運動部会にわかれており、談話部会には談話部と雑誌部が、運動部会には柔道部・撃剣部・弓技部・テニス部・ベースボール部・フットボール部・ボート部・自転車部・器械体操部・角力部がそれぞれ所属していた。なお、運動部会には遅れて徒歩部と遊泳部が加わった。

1903（明治36）年には組織の改定が行われ、談話部会と運動部会の区別を廃止、自転車部・器械体操部・角力部を削って11部とした。その結果、1907（明治40）年の校友会規則では談話部・雑誌部・柔道部・剣道部・弓技部・徒歩部・庭球部・蹴球部・野球部・短艇部・遊泳部の11部とされている。

校友会は「精神を修養し身体を鍛錬し以って校風を振作し兼ねて会員相互の親睦を厚くすること」⁽²⁰⁾を目的とし、正会員は柔道部以下の一部以上に入って運動を為すべきと定められた。ここでも会費として生徒から毎月15銭、職員から月俸の100分の1を集めていた。

1901（明治34）年秋、校舎移転の予定地である大塚に新しく会場を移して陸上運動会が開催された。『創立六十年』に「校友会の事業中最も特筆すべきものは大運動会」⁽²¹⁾とあるように、半年前よりその準備が進められ、当日は全生徒職員ともに競技に参加し規模が大ききものであった。1907（明治40）年からは皇族の参観もあった。

1902（明治35）年5月新旧生徒懇親会を開いてここで競漕会も行われた。古い2艇は朽ちていたため競漕会後に寄付金を募って新しく3艇を建造し、その進水式を10月に隅田川で行った。東京帝国大学・高等商業学校もこの競漕に参加していた。12月には利根川を経て銚子まで往復遠漕を行い、その後も毎年行われた。翌年には王子村に艇庫を設けた。テニスはこのころには既に対校試合を行うようになっており、1902（明治35）年5月、校庭に高等商業学校・慶應義塾・東京帝国大学・東京外国語学校等10校余りの学校を集め、紅白試合を行った。これがテニス総合競技会の始まりである⁽²²⁾。コートもそれまでは二か所であったが、その年の末には大塚・お茶の水・永楽町の三寄宿舍を合わせて7か所となった。

(4) 校友会と寄宿舍との関係

立地の良さと学校の奨励とが相まって校友会の活動はめざましいものであった。大塚の

寄宿舎はこれらの活動を行いやすくするために校友会各部本位の編成に改めた。1913（大正 2）年には校友会の役員を寄宿舎の寮長に置くなどして校友会との連携を図れるようにする動きがみられた。また、普段行う「運動の種類ごとに部を分け」⁽²³⁾て、運動部を単位として縦割りで生活させていた。その最大の利点として、「上級生と下級生、また、学科のちがったものが一緒に生活することによって、学校全体がその組織を通じて一になることができた」⁽²⁴⁾ことを挙げている。運動部の対外競技の選手慰労会や壮行会なども寄宿舎で行われ、部活動が寄宿舎での生活の中心となっていった。

このような寄宿舎の様子の変化の背景には、嘉納治五郎の考えが大きく影響している。嘉納治五郎が改革する以前の寄宿舎は森有礼の方針により兵營式の寄宿舎制度が導入されていた。1885（明治 18）年に文部大臣に就任した森有礼は、構想した教員養成政策の前提に「人物の養成」を据えていたが、その根幹として求められたのが従順、友情、威儀の三気質であった。のちに順良、信愛、威重と改められたが、彼はそれを養成すべく軍隊式分団組織と同様の組織を寄宿舎に採用していた。

その後嘉納は、高等師範学校着任 2 年後の 1895（明治 28）年にこの寄宿舎制度を改革した。森有礼の極端な形式主義を批判し厳格な規制を緩和していくかわりに、楽しいことへの理解が必要であると主張し、形式に拘泥せず精神を重んじる組織へと改革していった。その流れで寄宿舎における部活動に重点が置かれるようになったと考えられる。

第三節 対外試合を通じた各競技の発展

(1) テニス

1897（明治 30）年ごろには一橋の高等商業学校も東京高等師範学校と同じくらいテニスが盛んに行われており、1898（明治 31）年 11 月初めて行われた対抗試合はその後毎年恒例として行われるようになった。

1899（明治 32）年には、高橋清一という者が『実験ローンテニス術』を著し、1902（明治 35）年には橋本吾作らによって『ローンテニス』という小冊子が発行され、技の普及やテニスの普及に努めるといった活動もしていた。

1903（明治 36）年ごろより、東京高等師範学校と高等商業学校の他に早稲田と慶應も台頭してきて 4 校が互いに争うようになり、これらの学校が試合を行う際は大きな注目を集めた。1921（大正 10）年頃より硬球に改めたが、それまでの間にこれらの学校の対抗試合は長く行われ続けた。特に歴史の長い高等商業学校との試合は応援も熱烈なもので、スポーツの盛り上げにも貢献した。東京高等師範学校が諸学校とともに硬球に改めてからは新たに高等商業学校、早稲田、慶應との間に庭球リーグを組織してリーグ戦を行うようになった。1925（大正 14）年にこのリーグは廃止となったが、かわりに東京商科大学との対抗試合が復活し、毎年秋に試合を行っていた。

優秀な選手は海外の試合にも参加するようになり、このころの選手の一人である太田芳郎選手は、1924（大正 13）年の夏にパリの国際オリンピック大会の選手に選ばれた。卒業後もヨーロッパ諸国に出向き試合に参加。デヴィスカップ日本代表として 1927（大正 16）年から 1930（大正 19）年の 4 年間連続で出場するなどして名声を博した。

(2) 蹴球

蹴球は 1902(明治 35)年に正式に行われ、ラグビー式とアソシエーション式の両方が指導されていたが、坪井玄道がアソシエーション式のほうが日本人に適していると考えこれを推奨し同年の運動会において初めて正式な蹴球を公開した。東京高等師範学校校友会蹴球部が発行した『フットボール』の序文において、坪井は

この遊戯の特色とするところはもちろんいろいろあるが、常に人数を多く要し精力的であって絶えず協同一致の行動をとらなければならぬところは、その身体的方面、並びに、精神的方面に多大の好果あることは、余が深く信ずるところである⁽²⁵⁾。

とアソシエーション式フットボールを奨励する理由を述べている。

しばらくの活動は校内で練習をするに過ぎなかったが、1904(明治 37)年 2 月に東京高等師範学校の方から横浜外国人チームに試合を申し込んだ。9-0 で敗れたがこの部最初の対外試合として記念すべきものであった。この試合があつてから校内大会を開いたり、外国人チームとも試合を行ったりしたが、日本人のチームと試合をしたのは 1907(明治 40)年 11 月がはじめであった。『創立六十年』には「都下の某校」⁽²⁶⁾と書かれており、対戦校は明らかにされていない。

この部は各地の学校の依頼を受けて技の指導をするといった活動もしていた。坪井玄道がアソシエーション式の推進に努めていたころは「しきりに西洋諸国の著作雑誌を研究し、之を我が国民の気質体格に斟酌し、我が国に最も適当なる一式を案出」⁽²⁷⁾することに努めており、当時蹴球の研究が一番進んでいたのはこの部であったのではないかと考えられる。それ故に技の指導の依頼がきて、研究の成果をもとに蹴球の普及発達へ著しく貢献したことがわかる。主に青山・埼玉・山形・栃木・群馬・福島・茨城・姫路の師範学校・体操学校、前橋・下妻の中学校等で指導が行われたが蹴球の発展は充分にならず、当時高等専門学校以上で蹴球の練習を行っていたのは東京高等師範学校と慈恵医学専門学校くらいであった。

1913(大正 2)年に、第 1 回極東オリンピックという総合スポーツ大会がフィリピンから提唱され、東アジアの中華民国、日本との三国による大会が開かれた⁽²⁸⁾。第 1、2 回の大会は蹴球部も参加を尻込みしていたが、1917(大正 6)年第 3 回大会が東京・芝浦で開催されるとあつては見送るわけにはいかず、東京高等師範学校の先輩及び会員がその代表チームを組織して出場することになった。技術の向上のため青山・豊島の高等師範学校の卒業生と共同して東京蹴球団を組織しチームの指導にあてた。大敗はしたが初の国際大会というのが大きな刺激となって、国内でも翌 1918(大正 7)年に関東、中京、関西の 3 つの地域で、それぞれ別々に大会が行なわれた。

関東大会が東京蹴球団と東京高等師範学校の共催であり、東京高等師範学校の校庭が使用された。この大会は 1933(昭和 8)年の第 15 回大会まで続いた。1919(大正 8)年には英国蹴球協会が賞杯を寄贈するというので、嘉納治五郎大日本体育協会会長からもこのカッ

プを受け入れるためにも至急日本の協会をつくれとの指示を受けて、卒業生の内野台嶺らの尽力のもと 1921(大正 10)年 9 月に大日本蹴球協会が設立された。

1922(大正 11)年になると国内での試合も開くようになる。早稲田大学と東京帝国大学の蹴球部とともに都下大学専門リーグを組織しさらに 1925(大正 14)年にはこの組織を拡張し、技能の程度により 1 部と 2 部を設けて東京高等師範学校は早大・慶應・帝大・法政・一高とともに 1 部に所属し翌年にはこのリーグで優勝を果たした。他にもこの年の 1 月より 3 年にわたり広島高等師範学校と対校試合を行っていた。

(3) 柔道

柔道については 1902(明治 35)年 12 月、初めて大会が開催され、10 校余り 40 名以上の選手を招待して大会を開いた。また、他校の試合にも常に数名の選手が参加するようになった。部員数も年々増加するとともに技術も向上し、毎年秋に選手を招待して行う試合も、他校へ出向いて参加する試合でも常に好成績を修めた。1914(大正 3)年には慶應義塾との対校試合を開いている。1916(大正 5)年頃には有段者が 40 名以上にも上った。

(4) 陸上競技

遠足から発展した健脚競争は 1898(明治 31)年に行われて以来長距離競争として長く続けられ 1908(明治 41)年には毎年春と秋の 2 回、長距離競争を行うのが恒例となった。

1906(明治 39)年 10 月には生徒有志が歩行術研究会を作って歩行法を習ったり研究したりして技の向上に努めた。1909(明治 42)年 3 月大阪毎日新聞社主催の神戸大阪間マラソン競争において、関東唯一の出場校として 3 名の選手が出場した。また、1911(明治 44)年 11 月に行われた国際オリンピック競技会派遣選手予選会において、金栗四三・橋本三郎・野口源三郎の 3 名がマラソンに出場してそれぞれ 1 着・4 着・5 着の成績を修めた。こうして 1912(明治 45)年 5 月、金栗四三選手と東京帝国大学の三島彌彦選手とともにわが国最初の国際選手としてストックホルムに出発した。

大正に入り数年間は東京高等師範学校が長距離競争界を独占するといった状況が続いていたが、長距離以外の種目もこのころ漸次向上がみられた。当時日本の運動界を組織的に指導していたのは嘉納治五郎校長を会長とする大日本体育協会であったが、1913(大正 2)年に協会が開催した第 1 回陸上競技会においてマラソン・棒高跳び・15 里競争で東京高等師範の選手が 1 位を獲得した。

1915(大正 4)年に上海で行われた第 2 回極東選手権競技大会には長距離競争及び 800 メートル走で 1 着、次いで 1917(大正 6)年には東海道駅伝競走で関東選手 23 名のうち 17 名を東京高等師範学校の選手が占め関西チームを破り、1920(大正 9)年には第 1 回箱根駅伝に参加し優勝するなど、輝かしい成績を残している。このように長らく外部の競技会に参加する形で活躍の場を広げていった陸上競技だが、1925(大正 14)年には東京帝国大学との対校試合を開くようになっている。毎年春に開催し、1931(昭和 6)年まで続いた。

総括

東京高等師範学校は日本の教員養成機関であるため、国が積極的に優秀な教授や外国人教師を多数招いたことによって様々なスポーツが伝わり奨励されていったと言える。スポーツの黎明期におけるリーランドや坪井の功績は非常に大きなものであった。また、嘉納治五郎が理想とする立派な教員となるための精神を養う手段として運動を重視し、彼の部活動の奨励への尽力は甚だしいものであった。

期間にしては僅かではあったが体操伝習所を附属にしたことも東京高等師範学校における運動の地位を高める要因となったのではないかと考えられる。体操伝習所の附属を廃止した後も教員養成における体育の重要性は依然として主張されており、実際に体操専修科も設けられた。体操を専修しない者も健康な身体と剛健な精神を養う機会として学問の合間に運動を行えるようにと部活動への参加が定められるようになったと考えれば、当時学生にも教師にも運動がとても必要なものであると考えられていたことがわかるし、運動をさせるような仕組みを確立したことは運動スポーツの普及に大きく貢献したと言える。

さらに東京高等師範学校は皆寄宿制である。学校で学業に専念した後も寄宿舎に帰れば仲間がいて、スポーツの環境も整っている。学生たちはこの放課後の時間を存分に活用して自分の技を磨いたり、友人と競い合ったりしてスポーツを楽しんだのであろう。以上のように、運動を重視する指導者がいて、その人物が運動を奨励して組織や仕組みを作り、かつその取り組みを実行する場と時間があつたところに東京高等師範学校における部活動の発展の特徴を見出すことができる。

〔註〕

- (1) 文部省が 1878 (明治 11) 年体操伝習所を設置しその教師としてアメリカから G.A.リーランドを招聘したが、当時仙台英語学校に在職していた坪井玄道は彼の通訳をしながら各地から集まった伝習員に体操を中心にした保健や体育の教科を教えていた。通訳しているうちに体操法を身につけた坪井は、任期満了してリーランドが離日したあとは中心となって体操教科の充実に尽くしている。体操伝習所においては早くから体操を学校の正科にすべきと主張し、東京高等師範学校においては学校に体操の授業法を研究させて卒業時に体操の免許状を合わせて与えるべきであると強調した。
- (2) 東京文理科大学『創立六十年』東京文理科大学、東京高等師範学校、1931年、397頁。
- (3) 同上、398頁。
- (4) 古城庸夫「ボート競技が行った遠漕についての研究」(江戸川大学紀要『情報と社会』第 21号、2011年3月、所収)、43-52頁。
- (5) 茗溪会『東京茗溪会雑誌』第6号、1883年、3頁。
- (6) 前掲『創立六十年』、398頁。
- (7) 加藤仁平『嘉納治五郎：世界体育史上に輝く』逍遙書院、1964年、154頁。
- (8) 同上、154頁。
- (9) 前掲『創立六十年』、369頁。
- (10) 同上、369頁。
- (11) 同上、399頁。

- (12) 前掲『嘉納治五郎：世界体育史上に輝く』、153 頁。
- (13) 前掲『創立六十年』、141 頁。
- (14) 同上、141 頁。
- (15) 嘉納治五郎『青年修養訓』同文館、1910 年、100-101 頁。
- (16) 東京高等師範学校『東京高等師範学校沿革略志』東京高等師範学校、1911 年、51 頁。
- (17) 前掲『創立六十年』、403 頁。
- (18) 高等師範学校『高等師範学校一覧』高等師範学校、1901 年、115 頁。
- (19) 前掲『創立六十年』、402 頁。
- (20) 東京高等師範学校『東京高等師範学校要覧』東京高等師範学校、1911 年、309 頁。
- (21) 前掲『創立六十年』、408 頁。
- (22) 同上、405 頁。
- (23) 前掲『嘉納治五郎：世界体育史上に輝く』、154 頁。
- (24) 同上、154 頁。
- (25) 東京高等師範学校校友会蹴球部『フットボール』大日本図書株式会社、1908 年、序文。
- (26) 前掲『創立六十年』、412 頁。
- (27) 同上、406 頁。
- (28) この大会はフィリピンの宗主国であるアメリカがその地でスポーツを盛んに奨励し、フィリピン YMCA の体育主任エルウッド・ブラウンが「極東オリンピック」として開催を提唱してきたことに始まる。これに対応したのは大日本体育協会であったが、協会としてはアメリカ人が主導権を握っていること、キリスト教の宣伝に利用されていること、すでに国際オリンピックへの参加で手一杯であること、大日本体育協会の財政に余裕がないこと、などの理由からこの極東オリンピックに消極的であった。ちなみに当初「極東オリンピック」としていたが、国際オリンピックの創始者ピエール・ド・クーベルタンがクレームをつけたことにより、第 2 回以降「極東選手権競技大会」と改められた。

第五章 学習院における部活動

第一節 学習院の沿革

現在の学習院の前身となる学問所が 1847 年(弘化 4 年)に京都御所日御門前に開講する。公家の勢力を無力化するために禁中並公家諸法度が定められて以来、この学問所が開講されるまで久しく公家教育のための学校は開講されていなかった。そのため、この学問所の設立は幕末における公家の新しい動きを示すとして注目を集めた。この学問所は 1849 年(嘉永 2 年)の 4 月に学習院という名称が定められ、東京に学習院が設立された以後の時代は区別のため「京都学習院」と呼ばれるようになる。

1868 年(明治元年)4 月に京都学習院は皇学所・漢学所の前身となる機関である大学寮代と改称された。この大学寮代には、国学者以外にも漢学者たちも教授として任用されていたが、教学界の主導権を巡って両者の対立が激化したため、皇学所・漢学所とに分化して解説することとなった。京都学習院は漢学所となり並立したがその翌年に閉鎖をされる。これは東京遷都により、東京の昌平学校などを基礎として新たに設立された大学校にその機能を奪われたためである⁽¹⁾。

3 年後の 1871 年(明治 4 年)に明治天皇は華族一同を宮中に招致し、全国民の中でも特別貴重な地位にいる華族は特に勤勉であればならず、その教育についてより重要視しなければいけないという内容の勅諭を与えた。この勅諭をきっかけに、取り急ぎの取り組みとしてまず 1874 年(明治 7 年)に華族の親睦団体および建設物である華族会館内に勉学局が設置された。その後 1876 年(明治 9 年)の華族会館新年会の際に、太政大臣三条実美や右大臣岩倉具視などから西洋各国の貴族学校に倣った華族学校の設立を早急にすべきだという意見が述べられ、華族学校設立の具体的構想が進み、華族学校設立大意が作成された。この中では、男女向けの学校それぞれ設けること、幼稚園を設置し 16 歳まで一貫教育を行うことが定められた。校舎は神田錦町(現在の神保町・大手町あたり)に建設されることとなり翌年 1877 年(明治 10 年)に開校された。尚、当初の生徒数は華族の子弟 130 名と子女 30 名であった。この際に天皇より改めて「学習院」の勅額を下賜され、1884 年(明治 17 年)には宮内省所轄の官立学校になる。

設立年に制定された「華族学校学則」により、華族は学習院への無試験進学と授業料納入不要の旨が規定されていたが、一般士族の生徒の入学を許可していた。ただし、一般士族に関しては一ヶ月の授業料として金 50 銭の納入が定められていた。当初非華族の生徒数は男女合わせて 50 名ほどであったが、7 年後には 80 名ほどに増えていることから上層士族の家庭からの人気が高まっていたことが分かる⁽²⁾。

1885 年(明治 18 年)には華族女学校が四谷に設置され、その後明治 39 年に学習院と合併し学習院女子部となったが、大正 7 年には女子学習院とし独立した。このように華族の男女共に安定した教育が受けられる基盤が完成していった。

1888 年(明治 21 年)に学習院は旧校舎の火事のため、虎ノ門へ移転する。同年、輔仁会が創設される。その 2 年後には四谷に移転をし、その後最終的に明治 41 年に現在の学習

院大学がある目白へ中等科以上が移転をし、以後その地に定着した。

第二節 校友会組織「輔仁会」

(1) 輔仁会設立の経緯

学習院における学生有志の団体の発足は虎ノ門の寄宿舎生活に始まる。文芸関係(錦繡社・鉄壁社)⁽³⁾の他にも、有志のスポーツ団体としてテニス会やボート会、ベースボール会が存在していた⁽⁴⁾。

しかし同様の内容の活動を行う小団体が増えたことにより、学生間の軋轢が生まれるようになった。このような事態を打開すべく、1888(明治21年)学生の有志4名がこれらの小団体を管理・統合を目的として寄宿舎倶楽部を結成した。彼らは倶楽部雑誌の発刊等で、寄宿舎生の結束、延いては同様内容の小団体の統合を目指した。だが寄宿舎倶楽部の会員外の生徒というものも存在しており、しばしばその生徒たちと衝突することがあったという⁽⁵⁾。

その状態を見かねた当時の院長である三浦梧楼(人物詳細は後述)の進言により、尋常中学科以上の生徒の諸活動の中心機関として新たな組織の創立がなされることになった。この組織が輔仁会である。この会名は『論語』顔淵篇の「君子以文会友、以友輔仁」(君子は文を以て友と会し、友を以て仁を輔く)という一節に由来する。三浦はこの会名に、学問やその他活動で知り合った友と相互に自らの仁徳を高めあってほしいという思いを込めたのであった。三浦の学習院に対する思いは、「上鴻図を翼賛し、下人民の儀表となり、以て国光を四方に輝さんこと豈難からんや」という言葉のように、この学校が輩出した人物が、一般の人々の手本となり、それにより国の威厳を広く四方に知らしめることにあった、と伝えられる⁽⁶⁾。

三浦は1847年(弘化3年)に萩藩士の家に生まれ、明倫館で学び奇兵隊入隊、戊辰戦争などに従軍後兵部省に入省した(最終階級は陸軍中将)。彼は長州出身でありながら、藩閥政治に異を唱えた人物であったため陸軍内で山県有朋などと度々対立した。明治17年にヨーロッパ視察へ行った際に、日本の軍省内に教育を司る機関が存在しないことに気づく。その帰国後、藩閥に頼らない新たな陸軍の教育システムの改革を唱えた意見書を提出するが、結果左遷を命じられたため陸軍職を辞した経緯がある。

その後、学習院の院長に任命されるのであるが、元々三浦は学習院のような学校での教育には興味がなかった。この話を聞いた時も、

殊に自分は育英事業、子供の面倒を見ると云ふことは、丸で念頭にない。所謂門外漢であるから、到底承諾は出来ぬ⁽⁷⁾。

と、強く拒んだというが、半ば強引に事後報告という形で院長就任が決定したと自伝には記されている⁽⁸⁾。

だが、院長になってからは学習院の「天皇直轄」の学校という特殊性を生かした教育を行うことを目指しており、卒業生にはゆくゆくは軍幹部としての活躍を期待していたとい

う。このことから、輔仁会設立にも身心の健全な発達と国家・社会への高度な帰属意識を掻き立てるなどの意味を持たせていたのではないかと推測する。

(2) 輔仁会に参加した部の種類

明治 22 年の創設時に輔仁会に設置されたのは、編纂部・演説部・運動部・英語部・仏語部・独語部の 6 つであった。このうち、運動部の中には野球部・陸上部が存在していた。庭球部の創設は明治 35 年頃とされており、輔仁会が発足した当時よりテニス会という有志団体が存在したことは明らかだが、『輔仁会雑誌』にも庭球部に関する記載が見当たらないため、発足当時より正式な部として活動していたわけではなかったと見なされる。また、水上部(端艇)に関しては正式な部活としての創設は明治 33 年であるが、庭球と同様に輔仁会発足時より有志団体のいくつかが活発に活動しており、東京府尋常中学校(のちに府立第一中学校)が主催した競技会にも来賓競漕の部に参加するなど、学生端艇の草創期を支えてきたようだ。

明治 25 年の「輔仁会規則」改編により、組織の簡素化がなされ文学部と武術部(のちに体育部に改称)の 2 つのみとなるが、さらに明治 31 年の改編により体育部の中に陸上部と水上部という 2 つの括りが作られ細分化された。この分け方は、輔仁会の運営組織の都合で便宜上このような形になっており、この大まかに括られた各部より輔仁会委員が数名出され輔仁会の運営に当たった。明治 25 年の時点で体育部の下には野球部・庭球練習などの諸活動・競歩競走などの諸活動の 3 つの部門が付属していた⁽⁹⁾。

第三節 輔仁会の活動詳細

(1) 輔仁会全体での活動

まず、主な活動として挙げられるのが輔仁会大会である。この大会は各部の活動を紹介し批評を求めることを目的としており、客員(旧教職員や卒業生)が招待された。この大会は明治 24 年の「輔仁会規則」改編以降、年に 3 回の頻度で実施されるようになるが、最終的に春と秋の年 2 回の開催に落ち着いた。主に文化系(輔仁会でいう文学部)の部の発表がほとんどであり、生徒による演説・歌・朗読が行われた他、外部の著名な人物を招いて講演会を行うなど生徒の学びの場でもあった。明治 30 年代に入ると、前述の目的に加えて会員、客員の相互の親睦を深めるための行事となり、楽器演奏や手品、学習院初等科生による唱歌などといった余興プログラムが組み込まれた。その結果、当初会員であった一部の生徒による行事だった輔仁会大会は、学習院全体の年中行事として定着するようになった。

また明治 24 年に後の大正天皇である皇太子嘉仁親王が学習院の教職員・学生を赤坂離宮に招き、学習院初の運動会を行った。その後その主催者は輔仁会に移され、明治 29 年に四谷校舎にて輔仁会主催第一回陸上運動会が開催された。徒競走や高跳び、砲丸投げなどの競技が行われた⁽¹⁰⁾。

(2) 輔仁会運動関係各部の活動

a. 野球部

1889年(明治22年)輔仁会設立と同時に創部された野球部は、東京帝国大学・慶應義塾・第一高等学校・青山学院等の野球部と共に学生野球の草分け的存在を担った。その活動を活発化させたのは1896年(明治29年)に輔仁会規則の細則の一つとして野球部規則が制定された頃からとされており、正則尋常中学校・宇都宮尋常中学校・高等師範学校・高等師範学校附属中学校・帝国大学農科大学・青山学院・麻布尋常中学校などの学生・生徒と試合を組み、連戦連勝の成績を収めたとの記録が残っている⁽¹¹⁾。このように初期より対外試合を組み、技術向上に努めていたことが分かる。対戦相手によって、選手の編成を「中等科の学生のみ」や「高等科の学生のみ」と分けていたようであるが、特に中等科の選手の活躍がめざましかったようで、1908年(明治41年)に目白の新校舎に移転してからも麻布中学校・正則中学校・立教中学校(尋常中学校は明治32年の「中学校令」改正により中学校に改称)などと定期的に試合を行い、概ね勝利を収めていた⁽¹²⁾。

大正年間に入ると特定の学校との定期戦が行われるようになった。対東京高等師範附属中学校戦、通称「附属戦」では大正2年から15年の間に9回行われ、4勝5敗の戦績であった。この附属戦は今でも対筑波大学附属高校総合運動定期戦として学習院高等科と女子高等科の行事として残っている。また対第一高等学校戦では大正15年以降15回行われ、3勝12敗と全盛期の頃に比べると成績が伸び悩む結果であった。また、初めての遠征として、大正2年に高等科が伏見桃山御陵参拝のために京都へ修学旅行に行った際に同志社大学野球部と対戦した⁽¹³⁾。

このように、学習院野球部は全国的にも学生野球の草分け的存在を担い、活躍をしていたことが記録から分かる。一方で、その指導に他の学校のように外国人教師の影響があったかどうかについては不明である。が、恐らく野球部ができる以前に存在していた有志団体のベースボール会を組織していた生徒・学生らは何らかの経験を通して野球のルールを知り継承していったのではないかと推測される。

b. 庭球部

輔仁会設立以前より、野球部同様有志団体としてテニス会が発足し活動をしていたが、その活動に関する具体的な記録は見つかっていない。学習院における庭球競技に関する初めての記録は1892年(明治35年)東京高等師範学校主催の府下各学校総合庭球会に参加した際のものである。この大会には輔仁会陸上部より4名が参加したが、当時の東京高等師範学校は東京高等商業学校・慶應義塾・早稲田大学と並ぶ東京都学生庭球界の名門であったため、敗北を喫している。また参加者の所属を見て分かる通り、庭球競技専門の部活動は存在しておらず、陸上部が行っていた各方面の活動の一つとして庭球は存在していた⁽¹⁴⁾。

また、この頃から1895年(明治38年)にかけて、東京府立第一中学校などの諸学校でも庭球が盛んに行われるようになり、他校選手の技術が著しく向上していったため学習院内でもそれに対抗できるようにと練習が盛んになった。学生の盛り上がりと並行し、1896年(明治39年)に学習院の中庭にコンクリートのテニスコートが完成した。これ以前の校舎には庭球をする専用の敷地はなく、土の運動場の一角を利用して行っていたと考えられ

る。そしてこのコートの完成を報じた輔仁会雑誌第 69 号によろやく「庭球部」という記述を見ることができると、庭球部は新コートの完成に先立って成立した部活動と推測できる。

この年には東京帝国大学・東京高等商業学校・東京高等工業学校・台湾協会専門学校(拓殖大学の前身)・東京高等師範学校・慶應義塾・早稲田大学・東京美術学校(東京芸術大学美術学部の前身)の 8 校の選手を招待して学習院庭球部主催総合大会が開催されるなど、庭球部は盛り上がりを見せていった。また、大正年間に入ると学習院内部の大会として閣僚対抗優勝旗争奪戦と称された大会が春と秋の 2 回毎年開催されるのが恒例となった。

硬球を採用したのは大正年間に入ってからであるが、その後も学生テニス界の強豪として君臨した。

c. 陸上部

陸上部は 1897 年(明治 30 年)頃より活動を開始したとされており、当時は前項の庭球部の記述からも分かる通り野球以外の競技全般を幅広く行う部活動であった。陸上競技専門の競走部として独立するのは大正年間に入ってからである。主な活動は他校の運動会への参加であり、各個人が短中距離競走などの競技で好成績を収めた。

また、『輔仁会雑誌』第 63 号に掲載された陸上部報告の中に陸上部の中にフットボール部を設けるとの記述がある。ここで言うフットボールとはラグビーを指しており、学習院尋常中学科に在学していた田中銀之助とイギリス人教師エドワード・クラークによって日本最古のラグビー部が発足した慶應義塾の後を追って学習院内にも結成された。しかしすぐにラグビー部は自然消滅をしてしまい、その再興は昭和年間に行われることとなった。

d. 水上部

水上部は 1900 年(明治 33 年)の輔仁会規則改正によって誕生した部活動であり、それ以前は端艇競技については輔仁会体育部の管轄であった。輔仁会体育部の管轄の時代から東京府尋常中学校(後の府立第一中学校)学友会第 1 回競槽会などに来賓競槽として学習院の学生が参加をしていた。この大会を機に、学習院専用の端艇を整備する動きが起こり、3 艇が新造された⁽¹⁵⁾。

水上部が誕生した後に第一高等学校主催の全国中学選手競槽大会に参加をして以来、ほとんど対外活動を行っておらず、輔仁会端艇競槽会など学習院内での大会が主な活動目的となっていたのだがその理由については探索したものの不明に終わった。大正年間に入ると、全日本スカール選手権のような大会に出場する選手が増え、学習院水上部は競槽界に躍進した。

むすび

前述した 4 つの部活動の記述からも分かる通り、各競技共に、学生スポーツの黎明期を支えており、その学校内での発展のために対外試合に積極的に参加したと推測できる。外国人教師の介入については、そもそも学習院では外国語の授業等にも外国人教師を雇用していたという記録が見受けられなかったためなかつたと考えられる。恐らく、他校とのつながり、あるいはそのスポーツに関する知識を得る機会があつた学生・生徒によって余

暇の時間に自主的に始められたものではないかと推測できる。学内での大会も活発だったため、絶対的な指導者がいなくとも生徒間で技術の習得が行うことが可能だったのではないだろうか。また、第一節で述べた通り、学習院は元々華族が通う学校として設立された機関であるが、一般の学生もその割合は不明だが一定数いた他、当時の三浦院長の輔仁会設立の思惑にもあるように将来の軍幹部候補を育成する意味もこめて、スポーツ課外活動に打ち込む学生・生徒を奨励していたと思われる。だが、それだけではなく輔仁会の活動を通して生徒同士・対教師との和睦を図りこの活動を通して自分自身の仁徳を高めることも目的とされている。学習院での部活動の発達、理想の生徒像に沿った積極的な教育活動の一環であり、他の学校と比較して大きな関与があったと結論づけたい。

〔註〕

- (1) 山本正身『日本教育史——教育の「今」を歴史から考える』慶應義塾大学出版会、2014年、65頁-66頁。
- (2) 学習院百年史編纂委員会編『学習院百年史』第一編、学習院、1980年、107頁。
- (3) 同上、831頁。
錦繡社・鉄壁社共に錦繡新報・鉄壁誌を毎週1回発行しており、寄宿舍内の話題に限らず様々な話題に対して雑誌を通して主張を繰り広げていたとの記述がある。
- (4) 前掲『学習院百年史』、831頁。
- (5) 同上。
- (6) 同上、832頁。
- (7) 三浦梧楼／小谷保太郎編『観樹將軍回顧録』大空社、1988年(原著は政教社より)、246頁。
- (8) 同上、248頁。
- (9) 前掲『学習院百年史』、835-842頁。
- (10) 同上、849頁。
- (11) 同上、863頁。
- (12) 同上。
- (13) 同上、864頁。
- (14) 同上、865頁。
- (15) 同上、870頁。

第六章 東京府立第一中学校における部活動

第一節 東京府立第一中学校草創期

(1) 府立第一中学校の沿革

明治維新後、国内外の情勢に迫られており新政府は教育の整備にも力を注いでいた。しかし、当初新政府が着手したのは主として旧幕府の教育機関を政府直轄の学校にして高等教育機関を作ることであり（幕府の開成所は明治元年開成学校、明治2年に大学南校となる。また医学所も同2年に大学東校になる）、中等教育、初等教育については漢学塾や洋学塾にゆだねる形になっていた。東京では上記の漢学塾や洋学塾をルーツとする私立中学が多かった為、府立中学の設立は緩やかに行われていった。

1872（明治5）年8月3日文部省が「学制」を頒布した事によって、中等教育に関しても、根本的方針が示された。まず全国を8大区に分け、これを1学区と称し、各区に大学校を1校置き1大学区を32中学区に分けた。更に256中学校の、1中学区を210小学区に分け53,760小学校を置くことを定めた。そして東京府は「学制」の趣旨に基づいて、1873（明治6）年2月、「東京府管下中小学創立大意」を布告した。これは府下を6区に分けて、6つの中学校を設置しようとする計画であった。条文では、第1条の6中学区の区分より始まって15条まで存在し、小学校は115校設けること、教授人員、月給、生徒月謝、経費などの細かい規定があった。しかしこの計画は当時の府の財政事情はもちろんの事、さらには初等教育機関の設置もままならない状況の中で、結局は実現せずに終わってしまった。したがって、当時は府下において中等教育は全く私立学校に委ねられていたという事が理解できる。

こうした状況の中で東京府が、府立中学校創設に踏み出すきっかけが生まれた。1877（明治10）年8月、文部省から東京府に対し、東京大学予備門（旧英語学校）の移転跡地を東京府が中学校か英語学校を設置するつもりがあれば、貸し付けてもよいという照会があった。東京府としては中学校や英語学校設立の要望が多かったので、当初貸し渡しではなくその跡地を引き継ぎ、大学部予備門生とを接続させる学校を設置しようとしたが、文部省は貸し渡しを強く主張したため、東京府は当時の財政事情などもあり、いったん断ってしまった。しかし交渉を重ねていった結果、1878（明治11）年5月に譲渡はされなかったが、東京府は大学予備門の移転跡地を有利な条件で貸し付けを認められることになった。

ただしこの地での中学校開校は順調とはいかなかった。というのも文部省から貸し付けを受けた旧英語学校は脚気病院として使われており、すぐには明け渡せない状況であったからだ。結果として旧英語学校跡の脚気病院はなかなか移転しないため、当時の本郷区にあった規模の小さい玉藻小学校を仮用して1878（明治11）年に東京初の府立中学校、東京府立第一中学校は開校された。

1879（明治12）年になると府立第二中学が麹町区東京府庁内に設立された。1881（明治14）年には、府立一中は東京府庁内に移転し、二中と合併して東京府中学校に改称する。その後の簡単な沿革を示すと、以下のようになる。

- 1878（明治 11）年 東京府立第一中学創立 本郷区元町一丁目旧玉藻小学校を仮用。
- 1878（明治 11）年 校舎が狭かったため神田区表神保町（一橋外）旧高田藩邸に移転。
- 1879（明治 12）年 麴町区内幸町東京府庁内に東京府第二中学開設。
- 1881（明治 14）年 第一中学を第二中学に合併し、東京府中学校と改称（場所は麴町区内幸町東京府庁内）。
- 1884（明治 17）年 内山下町（旧麴町区、現千代田区）の新校舎に移転。
- 1887（明治 20）年 東京府中学校を東京府尋常中学校と改称し、築地に校舎を移転。
- 1899（明治 32）年 東京府尋常中学校を東京府中学校と改称し、麴町区西日比谷町一番地の新校舎に移転。
- 1900（明治 33）年 東京府中学校を東京府第一中学校と改称（立川に二中設立の為）。
- 1901（明治 34）年 東京府第一中学校を東京府立第一中学校と改称。
- 1929（昭和 4）年 校舎を日比谷から現在の永田町に移転。
- 1943（昭和 18）年 都制施行により東京都立第一中学校と改称。
- 1948（昭和 23）年 学制改革により東京都立第一新制高等学校と改称。
- 1950（昭和 25）年 東京都立日比谷高校と改称。

（2）学友会以前のスポーツ活動、AS 会（アスレチックスポーツ会）

府立第一中学が創立された 1878、1879（明治 11、12）年には、体育に「撃剣」（剣道）が採用されている。このことは当時大いに世論を刺激したそうだと。というのも、その頃剣道をやっていたのが、警視庁だけだったからである。やがて 2、3 年して東京大学を始め陸軍海軍がこれを採用することになった。

学友会が結成される以前は AS 会という生徒の組織した体育活動の会があった。AS 会は本校最初の生徒の自発活動であり、のちの学友会の礎石となったものだった。創設は本校の内山下町時代（1884～1887、明治 17 年～20 年）でおそらく 1885～1886（明治 18 年～19）年頃のことである。それまで生徒の体育方面はおざなりにされていたが、この頃になって兵式体操が課せられ（1885、明治 18 年）、そしてこの AS 会の誕生により本校体育は盛り上がりを見せていた。AS 会とは「アスレチックスポーツ」の頭文字をとって名付けたもので、会員はほとんど全校的であり、役員には級長・副級長を当てた。当初は上級生 30～40 名のみ、ベースボール、ローンテニス、コロッケボール、操櫓術、撃剣、柔術、その他遊戯運動を演習させた。その指導を行ったのは初めて本校に体操科を設置し、当時就任した教師黒崎信だった⁽¹⁾。

黒崎信は 1883（明治 16）年本校から体操伝習員として体操伝習所に派遣され、体操術及び生理を学び、1884（明治 17）年には体操伝習所を卒業して本校に戻った。当時、国内学校における体育方法に二つの流れがあり、一つが「体操伝習所」を中心にした小・中・師範学校のスポーツであり、もう一つが大学予備門の英語教師ストレンジの指導にはじまる大学高専のスポーツであった。黒崎信が体操伝習所に通っていた時代には、すでに伝習所内でベースボール、ボートのほかにクロッカー、フットボール等が行われていた。伝習

所の年報（1881、明治14年9月）には「諸器械ノ員数ヲ算スルニ…ベースボール8組・蹴鞠3個・循環球（クロッカー）2組…」⁽²⁾とある。

黒崎が体操伝習所でこれらを行ったという明確な記述はないが、時期が重なっているという点からベースボールやローンテニス体操伝習所にいた頃にその存在を知り、本校に伝えたのではないかと推測する事が出来る。そう考えれば、黒崎は本校最初期の体育に重要な貢献をしたことが窺える。ただし黒崎が具体的にどのようにアスレチックスポーツ会に関与し、どのような指導を行っていたのかは文献が確認出来なかったために明らかにする事ができなかった。またAS会が学校の正課とどのような関係にあったのかも明確な記述を発見する事もできなかった。

第二節 学友会発足とその定着

(1) 勝浦鞆雄校長の尽力

学友会の発足に触れる前に、学友会創設に尽力した勝浦鞆雄校長について記述する。彼についての詳細な経歴は不明だが、確認できた範囲のみ『日比谷高校百年史』中巻を基に著す。彼は、1890（明治23）年着任から1909（明治42）年に退任するまでの19年間、日比谷高等学校の歴史の中で初めて長期間腰を落ち着けて各種の改革を行った校長であった。1850（嘉永3）年1月28日生まれで、この学校に着任したのは40歳だった。彼は10代を大阪で過ごし、漢学を修め、大阪に留学に来ていた高鍋藩士（詳細な人物は不明）と交わり、天下国家を論じたと言われている。一時堺県知事（詳細な人物は不明）の知るところとなり、堺県に出任し「史生」（日本の律令制において官司の四等官の下に置かれた職員の仕事）といった役職に就いた。

しかし1870（明治3）年に高鍋に行き「明倫堂」という藩校の助教に任ぜられ、数年後には藩校の教授となった。1878（明治11）年には和歌山県に招かれ和歌山県の小学校教育の建て直しを行ったり、医学校病院の設立主任に就いたりしたが、やがて和歌山県師範学校の開設に当たる事となったそうだ。この師範学校の勤務が評価され、文部省高官にもその名を知られるようになり、東京尋常師範学校に招かれてそこの幹事になったという経歴を持つ。

勝浦校長が着任した時分には府当局も府立の学校に無関心であり、尋常中学校における予算も少なく、向学心の強い生徒は私立の中学校を選ぶという状況が続いた。勝浦校長はこの沈滞期にあった尋常中学校の振興に熱意を持ち、その情熱と努力によって府立中学校の地位を大いに高めた。

(2) 学友会の発足

丸山淑人校長時代校内には運動にAS会、学芸に以文会の二団体があったが、勝浦鞆雄校長の赴任後これらを解散し、1890（明治23）年9月新たに全校を一团とした学友会を創設した。学友会の設立の意図として上記の府立中学校の現状から危機感を持ち、全校一体となって尋常中学校を盛り上げようという信念が基盤としてあった。教員と生徒が一体となってそれぞれの分野で協力しながら接触を深め、教室以外の活動で互いの誠意を見出し

ながら、責任や信頼を学ばせようという思いが学友会創設の出発点であった⁽³⁾。

以下は東京府尋常中学校学友会規則（明治23年）、全十五条である。

第一条 本会ノ目的ハ心身ノ発達及会員相互ノ親睦ヲ図ル

第二条 本会ハ東京府尋常中学校生徒及職員ヲ以テ組織スルモノトス

本校生徒及職員ハ会員タルノ義務アルモノトス

第三条 本会ハ東京府尋常中学校生徒及職員ヲ以テ組織スルモノトス

本校生徒及職員ハ会員タルノ義務アルモノトス 半途退学ヲ命セラレタル者ノ

外従来本校ニ関係アリシ者ハ会員一名ノ紹介ニ依リ会員タルヲ得

但紹介人ハ本人ニ関スル一切ノ責任ヲ負担スルモノトス

第四条 本会ハ便宜ニ依リ隨時左ノ件ヲ举行ス 文芸、芸術、運動、遠足、遊泳、漕艇

第五条 本会ヲ分チテ数部会トス 但部会ノ廢置ハ委員会ノ議決ニ準ズル

第六条 本会ニ左ノ役員ヲ置ク 但役員任期ハ一カ年トシ重撰スルコトヲ得

一 会頭一名 本校校長ヲ以テ之ニ充ツ本会一切ノ事務ヲ総理ス

一 委員長一名 本校教務主幹ヲ以テ之ニ充ツ委員ヲ幹理シ会頭ヲ補佐シ会頭事故アル時ハ代理スルモノトス

一 委員若干名 生徒ヨリハ毎教室三名職員ヨリハ五名（内三名ハ会頭ノ指名トス）トシ職員ハ職員中ヨリ生徒ハ毎教室ヨリ互撰ス

一 常議員五名 委員中ヨリ互撰ス 会頭ニ於テ委員会ヲ要セスト認ムル事件を評決ス会議ノ際ハ会頭委員長臨場スルモノトス

一 庶務理事四名 一名ハ会頭ノ指名トシ三名ハ委員ノ互撰トス

一 会計理事三名 一名ハ会頭ノ指名トシ二名ハ委員ノ互撰トス

第七条 部会ニ会幹ヲ置キ其部ヲ借弁セシム該部員中ヨリ之ヲ互撰シ其任期ヲ一カ年トス

第八条 部会ノ細則及事業等ハ委員会ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

第九条 各部会議決ノ事項ト雖モ本会ノ認許ヲ経ルニ非レハ執行スルコトヲ得ス

第十条 本会ハ毎学年ノ初ニ於テ委員会ヲ開キ毎年度ノ会務ヲ報告シ常議員庶務理事会計理事ノ改撰ヲ行フモノトス

第十一条 凡テ会議ハ過半数ノ出席員アルニ非レハ開会スルコトヲ得ス其ノ議長ハ会頭ヲ以テ之ニ充ツ但会議ハ普通ノ會議法ニ依ルモノトス

第十二条 会員中各生徒ノ会費ハ毎年金七拾円以上（即各員毎月俸給百分ノ一）ノ金額ヲ本会ヘ寄付スルモノトス

但臨時費ヲ要スルコトアルトキハ委員会ノ議決ヲ経テ各会員ヨリ徴集スヘシ
総テ既納ノ会費ハ事故アルモ返附セサルモノトス

第十三条 本会經費中ヨリ各部会ヘ補助金ヲ交付スルコトアルヘシ

但其金額ハ委員会ノ議決ニ依ルモノトス

第十四条 本会ノ細則ハ委員会ノ議決ヲ経テ会頭之ヲ定ム

第十五条 本会ニ建議シ若クハ規則ノ修正ヲ望ム者アルトキハ会員五名以上連署ノ草案

ヲ差出シ会頭ノ意見ニ依リ委員会ヲ開キ之ヲ義定ス⁽⁴⁾

また創設の翌年に当たる 1891（明治 24）年 11 月 26 日に『学友会雑誌』が創刊されている点から見ると、勝浦校長がこの組織を重視していたことが分かる。

（3）学友会に参加した部の種類

当初は演説、討論、懸賞文、運動、遠足、遊泳、漕艇、撃剣、柔術の各部を予定して委員も決めたが、学友会費が乏しかったために各部の設置は延期された。上記の 9 部は、学友会創設以前に既にある程度の実績のあった課外の諸活動が挙げられているようで、それらを学友会の形で組織化したものであるようだ。9 部に関する詳細な実績やこれらが創設された根本的な理由も不明だが、『日比谷高校百年史』上巻、および同中巻を基に部活動としての展開が目新しい遠足部、運動部、遊泳部の 3 つを以下で取り上げる。

a. 遠足部

学友会の最初の活動は 1890（明治 23）年 10 月の江の島鎌倉旅行であり、これが本校初の修学旅行となった。この活動は学友会創設と同時に設けられた遠足部によるものだった。遠足部規則第二条には、

第二条 遠足ヲ分チテ定時臨時ノ二種トシ定時遠足ハ毎年一回初夏ニ於テ本校生徒修学旅行ト合同シテ之ヲ行ヒ臨時遠足ハ随時催スモノトス但臨時遠足ノ際必要ノ役員ハ其都度本会頭ノ指名ニ因リ之ヲ設ク⁽⁵⁾

とあり、修学旅行だけでなく遠足の実施も請け負っていた。1902（明治 35）年度の学友会規則改正（詳細な改正理由は不明）でこの部は廃止された。修学旅行及び遠足の事業は後に運動部に引き継がれた。

b. 運動部

この部も、遠足部と同様 1890（明治 23 年）に学友会が創立されると同時に設けられた部である。運動部規則によれば、

第一条 本部ハ陸上運動ノ技ヲ修練シ身体ヲ強健ニシ活発ノ志氣ヲ養ヒ併セテ交誼ヲ厚クスルヲ以テ目的トス

第四条 開会ハ大会及小会トシ大会ハ毎年本校卒業証書授与式ノ際之ヲ施行シ卒業生ヲ餞スルモノトシ小会ハ随時之ヲ開クモノトス⁽⁶⁾

とあり、この部は運動会を実施する部会であったが、1898（明治 31）年度運動部内に競争科とローンテニス科が設けられ、続いて 1900（明治 33）年度に野球科、1904（明治 37）年度に相撲科を加えて 4 科となった。1909（明治 42）年度にはこの 4 科が部に改められ、競争科は競技部に、他は庭球部・野球部・相撲部となり、運動部はこの体育 4 部を総括す

る本部機関となった。運動会開催の仕事は 1898（明治 31）年度より競争科に、その後更に競技部に引き継がれた。

c. 水泳部

1891（明治 24 年）に学友会の一部として「遊泳部」が設置され、7 月 13 日より 9 月 10 日まで有志 130 余名を日本遊泳協会（神伝流宗家旧津山藩士植原六郎左衛門翼龍の一門が組織した協会、遊泳部会幹長須川賢久が同流の達人であったことから同協会に指導を委嘱したものとされる）に依頼し、遊泳指導を受けさせた。場所は石川島二洲橋畔の協会の教習所で、後に大川中洲に移った。この頃の遠泳は品川沖台場往復を行っていた。

（4）部活動の種類

東京府立第一中学校の部活動は、上記にある 9 部を土台として発展したものもあれば、一から創設されたものも多く存在している。ここでは 1975（昭和 50）時点で存在していた運動部を挙げるが、いくつかの部の詳細に関しては後述にて触れる。

1890（明治 23）年学友会が設立されると、その一部会として遠足部、運動部、水泳部、漕艇部が設けられた。学友会創設以後から大正にかけて、射撃部、野球部、相撲部などが設けられ、陸上競技部と庭球部は運動部から派生して誕生した。大正時代に入ると蹴球部、籠球部の前身がそれぞれ対外試合、練習を行っていた記録が残っている。蹴球部は、大正時点では学友会の一部として数えられてはいないが、1926（大正 15）年、青山師範グラウンドで府立第六中学校と試合を行っている（どのような経緯で対外試合が行われたかは確認できなかった）。籠球部も、大正時代においては一部会としては認められていなかったが、有志がクラス対抗戦を行っていた。両部共に一部会として設けられたのは昭和時代に入って間もない頃だった。

昭和時代に入ると多くの部活動が誕生する。1931（昭和 6）年には弓道部が設けられ、道場開きも行われた。続いて卓球部が設立された。卓球部は元々部としては認められていなかったが、同好の者が尾畑、小北の両教師を中心に放課後生物教室の机を寄せて卓球をやっていた事が認められ、学校側が正式の卓球台二台を購入して、地下室での卓球部の活動が始まった。その後排球部や山岳部も部として認められ、1890（昭和 23）年にはラグビー部が誕生した。その後設けられる、拳闘部、スキー部、スケート部、ダンス部、バドミントン部、フォークダンスクラブ、サイクリングクラブ、ワンダーフォーゲル部は初め同好会として親しまれ、その後部として成立するという過程を辿っている。

（5）寄宿舎に関して

1909（明治 42）年から 1932（昭和 7）年まで校長を務めた川田正澄は、欧米視察を終えてから日本人の生徒が同年齢の欧米人の生徒と比べて体格が劣っていることに深い関心を示し、体格や体力の向上を目指した。柔道や、剣術を行う演舞場はすでに完成しており、活動もしていたので、次に求めたのが水泳場の宿舎であった⁽⁷⁾。1919（大正 8）年川田校長は運動場の改善と併せて、水泳場の新設を提案した。なぜ数ある部の中で水泳部なのか

という本校の水泳講習会の歴史が古いためである。

勝浦校長時代の 1904（明治 37）年には千葉県那古で旅館を借りて 121 名が 3 班に分かれて、3 週間にわたり遊泳練習を行っていた。1910（明治 43）年からは静岡県沼津近くの静浦が遊泳練習場として選ばれ、静浦では毎年の夏に生徒の水泳講習会が行われていた。しかし毎年 100 名近くの生徒が参加する水泳練習を考えたとき、宿舎を持たないのは不便、不経済であり、水泳指導に当たっていた者たちからも独自の宿舎を持ちたいという要望が強かった。そして幸いにも沼津市牛臥海岸の御料地の一部貸下げを請願し、そこに宿舎が建てられることとなった。牛臥の水泳宿舎は大正 9 年 7 月に工事が終わり落成式は学校で行われた。沼津に建てられたこの寄宿舍は昭和 8 年に千葉県勝山町に移築され、今日に至る⁽⁸⁾。

第三節 各部の動きとその後の発展

(1) 川上眉山と夏目漱石

夏目漱石は東京府立第一中学を 1884（明治 17）年に卒業している。1886（明治 19）年大学予備門は第一高等中学校となった。予備門から高等中にかけての夏目漱石は、小宮豊隆の『夏目漱石（上）』（岩波書店、1986 年）によると、

水泳もやればボートも漕ぐ、乗馬の稽古もすれば庭球もする。野球もやれば…器械体操などは群を抜いて上手かった⁽⁹⁾。

というように活動的な人物だったようだ。

川上眉山は 1885（明治 18）年に同校を卒業している。明治 16～17 年頃東京大学に二隻のボートがあったが、当時の学生間にボート熱が高まり大学において「忘濤会」（M・B・C）というクラブが作られた。後にこれが大学漕艇部となる。このボートのメンバーは隅田川から神田川に入り、お茶の水あたりまで漕ぎのぼった。彼らは好んでひし形の帽子を被ったがこれが後に大学の制帽となった。眉山はこのメンバーの一人であった⁽¹⁰⁾。

(2) 各部活動とその後の発展

以下では対外試合に発展している部を主に扱う。

a. 漕艇部

まずは漕艇部である。1891（明治 24）年 11 月 1 日、漕艇部第一回競漕会が隅田川上流にて開催され、開会会場には万国旗を掲げられるとともに船中に音楽隊が置かれた。競漕は午前 10 時から午後 5 時にまで至り、その総数は 11 回にのぼった。この行事の中に帝国大学、学習院及び第一高等中学校の学生と本校卒業生の組合（学生や校内という枠組みを超える範囲でのつながりがなぜ生まれたのかは未詳である）を交えていた。1892（明治 25）年には漕艇部第二回端艇競漕会が行われ、参加した学校が帝国大学、高等中学、学習院、日本中学、共立中学、攻玉社及び卒業生等であった。

その後も旭桜倶楽部といった学友会に属さない私設のクラブが出来たりと活発な動きを見せていたが、1897（明治 30）年、この年に学友会の規制に大改正（大改正の理由は未詳）があり、同時に漕艇部は廃止されてしまった。漕艇部は上記の活動からもわかるように常に生徒が熱狂する対象となっていたが、ボートの新調・保管・修繕等に多大の経費を要し、維持困難となった為に廃止せざるを得なくなってしまった⁽¹¹⁾。

b. 柔道部

1892（明治 25）年 4 月学友会に柔道部を置くことが決まったが、設立当時は校内に道場を建てる余地がなかった。1897（明治 30）年には柔道部は撃剣部と合併され武芸部となり、学友会員は必ずそのどちらかに入ることとなっていた。1912（明治 45）年に新築の武道場が落成。1920（大正 9）年に武芸部は武道部と改称し、柔道科も武道部所属の柔道部となった。1929（昭和 4）年には落成した永田町新校舎にも体育館地下に武道場が設けられ、柔道部の活動は毎年の校内大会、紅白試合、寒稽古などが主なものだったが、対 OB 戦（明治時代には柔道部 OB 会として蘭友会があった）も行われ、また対外戦も 1926（大正 15）年の対東京府立第六中学校戦を始めとして昭和に入ると次第に盛んになった。

1935（昭和 10）年 6 月 16 日、水道橋の講道館の大道場で開かれた第一回東京府中等学校体育協会柔道大会の第五学年の部で堂々の優勝を果たした。大会には 27 校が参加し、一中は初戦不戦勝、二回戦からの参加だった。三回戦では日本中学とあたり、準々決勝では立教中学、準決勝では東京府立第一商業学校と対戦した。決勝では府立園芸学校と対戦し副将の勝利が優勝の決め手となった。出場選手はこの勝利について第一の勝因は部員たちの根性ではなく、対外試合初出場の部員を終始力づけてくれた顧問の先生達であると語っている⁽¹²⁾。

c. 野球部

1885（明治 18）年頃、本校内山下町時代に AS 会という体育クラブが設けられ、その中で「ベースボール」も練習されていた。この頃は野球とは呼ばれず、「ベースボール」としか呼ばれていなかった。1900（明治 33）年になって学友会学友会運動部中に野球科が設けられ、これが言うまでもなく後の硬式野球部の前身となるのだが、1901（明治 34）年に経費欠乏により廃止され、1903（明治 36）年度に再興された。当時の活動としては春の小会と秋の大会が主なものであった。これらには学年や学級の有志がチームを作って参加していた。

対校試合は禁止されていたが（何故禁止であったかは未詳）、1906（明治 39）年、青山師範との試合を本校が初めて認め、同年 5 月 23 日青山師範グラウンドで対校試合が行われ、7 対 6 で一中が勝利。同年 5 月 30 日にも麻布中学グラウンドで対麻布中学校試合があり、12 対 12 で引き分けに終わった。6 月 7 日には郁文館グラウンドでの対郁文館試合が行われ、大勝。その後野球はますます盛んとなり 1909（明治 42）年には野球科は野球部となったが 1912（明治 45）年から校舎大修理と演舞場建設工事が始まり、運動場が狭くなったため、野球部は一時休止となって衰えた。1921（大正 10）年に野球部は復活再建し、全校

野球優勝戦が10月1日から15日まで行われ5年甲組が優勝した。野球部は年を追うほどに盛大となったが、大正13年まで対外試合は禁じられていた。

1926(大正15)年9月18日に対府立第六中学校戦が下高井戸の王子製紙球場で開かれ、12対6で一中が勝利。この頃野球部は有志が代々木練兵場で練習し、特に夏休み中は一高グラウンドを借り受けて練習した。1928(昭和3)年頃は毎週土、日曜の二日、代々木なまこ山付近で対六中戦備えて練習していたそうだ。校内の野球は永田町校舎に移ってからも盛んで、春の野球小会(5～6月)、秋の大会(9～10月)が毎年行われており、20～30チームが参加をして優勝を争った。1937(昭和12)年に一中野球部は中等学校野球連盟に加入し、以後野球部の活動は選手中心に移行する。校内野球春季小会は1937(昭和12)年まで、秋季大会は昭和14年までで廃止され、野球部も1942(昭和17)年度までで廃止となった⁽¹³⁾。

d. 陸上部

陸上部の母体となる競争科は1899(明治32)年に運動部中に創設された。校内では春季運動会、秋季陸上大会が行われていた。その後各校運動会では招待レース(どのような経緯かは不詳)が盛んになり本校の選手も招待に応じて活躍した。例えば1901(明治34)年、明治義会尋常中学で松村茂という生徒が二等賞、日本中学の運動会では松村と中島三代彦が660ヤード競漕に1, 2着を占めている。

1921(大正10)年には第一回全国中等競技選手権大会が初めて開かれ、本校から浅野均一、岩谷鷹之助(大正8年卒)が出場、浅野は三段跳びで優勝、岩谷は200ハードル走り幅跳びの二種目に優勝した。更に当時認められていた唯一の対校競技は対府立六中戦(なぜ府立第六中学校のみだったのかは不詳)で1925(大正14)年には一高のトラックで第1回対抗戦を行い、小林という選手が三段跳びで活躍している。1926(大正15)年には戸山学校で第2回を行い、悪天候ながらも本校が勝利をおさめている⁽¹⁴⁾。

e. 庭球部

庭球部の母体となるローンテニス科は1899(明治32)年に学友会運動部中に創設された。明治から昭和初期にかけて、この部活でも春季大会や秋季大会が行われ、校内での活動が活発に行われていた。1947(昭和22)年度には対麻布戦を皮切りに対外試合を多く行っている。同年には対都立八中戦、明治学院戦などが行われた。

1955(昭和30)年初頭には1958(昭和33)年卒の高橋・佐藤組が活躍し、東日本大会及び国体の都代表となった記録もある⁽¹⁵⁾。

考察

東京府立第一中学校は、他の学校と比較すると積極的に外国人教師を雇うという事があまり見られなかった。というのもおそらく上述にもあるが、この学校は当時財政面において不安定であり、そういった外国人教師達を呼びたくても呼べなかったのかもしれない。しかし、そんな状況の中で東京帝国大学や慶應義塾大学といった学校と比べても、遜色の

ないほど数多くの部活動が存在しているのは、やはりこの学校での指導者たちの底力であると思う。特に明治期に校長となった勝浦鞆雄校長は、この東京府立第一中学校の部活動の基礎を形作っているといっても過言ではない。彼は学力向上だけでなく、体育方面における基礎を形作り、充実させようとしていた。これを推測できる施策の一つがどの学校でも行われることのなかった体格検査である。

彼によれば「教授要旨改定の結果、従来の如く知育のみに偏せず、体育方面に留意せんとするため、1892（明治 25）年 4 月より体育検査を施行することとせり」⁽¹⁶⁾とある。そして本校ではその結果の統計をとり、同年齢者毎の平均を出し、それと個人の月毎の結果とを照合して優劣を定めていた。学業だけでなく体育においても優劣をつけ、かつそれが生徒の目にもわかりやすく映る事の出来る施策が生徒の心に火をつけ、学業、体育両方に生徒が力を入れようと意識できたのではないか。勝浦鞆雄校長は教師、生徒両者の士気を新たな施策を通して上げさせ、更に学友会を設立することで、生徒が活躍ないしは実力を公式に認めさせられる環境を整えたのではないかと思える。府立第一中学校の部活動が普及したのは勝浦鞆雄による向上心を持たせようという考えの産物なのではないかと考える。また部活動だけではなく運動会や修学旅行、遠足などが行われ始めたのも彼が校長に就任してからである。

この学校の百年史を見ると、その内容のほとんどが学友会主体で開催されている運動会や部活動に関する記述で、いかに生徒や教師にとってこれらが大切な行事であったかが目に見えて感じる事が出来た。この学校における部活動と正課のつながりを明確に知ることはできなかったが、部活動は指導者である校長の意向に強く反映され、かつそれが生徒や教師に与える影響もまた強いという事は理解できた。

〔註〕

- (1) 日比谷高校百年史編集委員会編『日比谷高校百年史上巻』日比谷高校百年史編集委員会、1979年、45頁。
- (2) 能勢修一『明治体育史の研究』逍遙書院、1965年、258頁。
- (3) 前掲『日比谷高校百年史上巻』、61頁。
- (4) 同上、361頁。
- (5) 同上、366頁。
- (6) 同上。
- (7) 同上、118頁。
- (8) 同上。
- (9) 小宮豊隆『夏目漱石（上）』岩波文庫、1986年、123頁。
- (10) 東京都立日比谷高校編『日比谷高校百年の歩み』東京都立日比谷高校、1978年、20頁。
- (11) 前掲『日比谷高校百年史上巻』、404頁。
- (12) 同上、416頁。
- (13) 同上、431頁。
- (14) 同上、422頁。

(15) 同上、424 頁。

(16) 同上、65 頁。

主要参考文献一覧

<第一章>

- 川島虎雄『日本体育史研究』黎明書房、1982年。
- 岸野雄三・竹之下休蔵『近代日本学校体育史』日本図書センター、1983年。
- 君島一郎『日本野球創世記』ベースボールマガジン社、1972年。
- 真行寺朗生・吉原藤助『近代日本体育史』有明書房、1984年。
- 武田英治『神奈川県体育史』第一印刷株式会社、1973年。
- 東京帝國大學『東京帝國大學五十年史』東京帝國大學、1932年。
- 東京帝國大學漕艇部編『東京帝國大學漕艇部五十年史』東京帝國大學漕艇部、1936年。
- 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史一』東京大学出版会、1984年。
- 『東京大学百年史 通史二』東京大学出版会、1985年。
- 東京大学弓術部・赤門弓友会『東京大学弓術部百周年記念誌』東京大学弓術部、1991年。
- 東京大学運動会陸上運動部< <http://www.undou-kai.com/club-track-field/>>。
- 中澤篤史「大正後期から昭和初期における東京帝国大学運動会の組織化過程：学生間および大学当局の相互行為に焦点を当てて」（『体育学研究』、東京大学教養学部体育研究室、2008年、所収）。
- 服部喜久雄『一高三高野球戦史』印刷局朝陽会、1954年。
- 渡辺融「F,W,ストレンジ考」（『体育学紀要』第7号、東京大学教養学部体育研究室、1973年、所収）。

<第二章>

- 公益財団法人講道館「飯塚国三郎」
<http://kodokanjudo-institute.org/doctrine/palace/kunisaburo-iizuka/>
- 慶應義塾『慶應義塾五十年史』慶應義塾、1907年。
- 『慶應義塾百年史中巻（前）』慶應義塾、1960年。
- 『福澤諭吉全集』第十四巻、岩波書店、1961年。
- 慶應義塾史事典編集委員会『慶應義塾史事典』慶應義塾、2008年。
- 慶應義塾体育会『若き血燃ゆ：慶應義塾体育会百年の軌跡：慶應義塾体育会創立百年記念誌』慶應義塾体育会、1992年。
- 慶應義塾体育会蹴球部黒黄会『慶應義塾体育会蹴球部百年史』慶應義塾大学出版会、2000年。
- 慶應義塾体育会柔道部
<http://mitajuyukai.gr.jp/home/about/about02/>
- 慶應義塾体育会短艇部「早慶レガッタ」
<http://keiorowing.sports.coocan.jp/about/soukei.html>

慶應義塾柔道部史編纂室編『慶應義塾柔道部史』三田柔友会、1933年。

——『慶應義塾柔道部史第二卷』三田柔友会、1978年。

慶應義塾野球部史編集委員会編『慶應義塾野球部史』慶應義塾体育会野球部、三田倶楽部、1989年。

藤堂良明『柔道の歴史と文化』不味堂出版、2007年。

福澤諭吉／マリオン・ソシエ、西川俊作編『西洋事情』慶應義塾大学出版会、2002年。

三田漕艇倶楽部百周年記念事業委員会『百年のあゆみ』慶應義塾大学体育会端艇部・三田漕艇倶楽部、1989年。

港区教育委員会「港区ゆかりの人物データベース「平岡漣」

<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/yukari/j/man-detail.cgi?id=80>

< 第三章 >

安部磯雄『青年と理想』岡倉書房、1936年。

早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』第一巻、早稲田大学出版部、1974年。

——『早稲田大学百年史』第二巻上、早稲田大学出版部、1977年。

——『早稲田大学百年史』第二巻下、早稲田大学出版部、1977年。

——『早稲田大学百年史』第三巻上、早稲田大学出版部、1980年。

——『早稲田大学百年史』第五巻、早稲田大学出版部、1997年。

< 第四章 >

今泉朝雄「東京高等師範学校における嘉納治五郎の活動とその思想」（日本大学教育学会『教育學雑誌』第32号、1998年3月、所収）。

今泉朝雄「森文政期師範学校寄宿舎とその変化」（日本大学教育学会『教育學雑誌』第38号、2003年3月、所収）。

香川サッカーライブラリー

http://library.footballjapan.jp/user/scripts/user/story.php?story_id=994

加藤仁平『嘉納治五郎：世界体育史上に輝く』逍遙書院、1964年。

嘉納治五郎『青年修養訓』同文館、1910年。

嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センター

http://100yearlegacy.org/Kano_Jigoro/Chronological_Table/

高等師範学校『高等師範学校一覧』高等師範学校、1901年。

古城庸夫「ボート競技が行った遠漕についての研究」（江戸川大学紀要『情報と社会』第21号、2011年3月）。

生誕150周年記念出版委員会編『気概と行動の教育者：嘉納治五郎』筑波大学出版会、2011年。

高橋航『帝国日本とスポーツ』塙書房、2012年。

東京高等師範学校『東京高等師範学校沿革略志』東京高等師範学校、1911年。

東京高等師範学校『東京高等師範学校要覧』東京高等師範学校、1911年。

東京高等師範学校校友会蹴球部『フットボール』大日本図書株式会社、1908年。

東京文理科大学『創立六十年』東京文理科大学、東京高等師範学校、1931年。

東京文理科大学『東京文理科大学閉学記念誌』東京文理科大学、1955年。

日本テニス協会HP

<http://www.jta-tennis.or.jp/history/tabid/305/Default.aspx>

日本ボート協会HP

<http://www.jara.or.jp/history.html>

茗溪会『東京茗溪会雑誌』第6号、1883年

< 第五章 >

学習院編『学習院の百年』学習院、1978年。

学習院百年史編纂委員会編『学習院百年史』第一編、学習院、1980年。

三浦梧楼／小谷保太郎編『観樹將軍回顧録』大空社、1988年(原著は政教社より1925年刊)。

山本正身『日本教育史——教育の「今」を歴史から考える』慶應義塾大学出版会、2014年。

< 第六章 >

石川金太郎『東京府立第一中学校沿革史』(復刻版)1900年

如蘭会『八十年の回想：尋中・一中・日比谷高校』日本製版株式会社1958年。

東京都立日比谷高校編『日比谷高校百年の歩み』東京都立日比谷高校、1978年。

東京府立第一中学校編『東京府立第一中学校一覧』東京府立第一中学校、1927年。

東京府立第一中学校編輯『東京府立第一中学校創立五十年史』東京府立第一中学校、1929年。

能勢修一『明治体育史の研究』逍遙書院、1965年。

日比谷高校百年史編集委員会編『日比谷高校百年史上巻』日比谷高校百年史編集委員会、1979年。

——『日比谷高校百年史中巻』日比谷高校百年史編集委員会、1979年。

山崎謙『都立高校のすべてがわかる本』山下出版、2000年。

2016年度 山本ゼミ共同研究報告書

「部活動」の起源と発展に関する教育史的研究

2017年3月31日 発行

発行者 慶應義塾大学文学部教育学専攻山本研究会
<代表 山本正身>

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

慶應義塾大学文学部内

TEL 03-3453-4511 (内) 23112

